小学校歴史教科書における
韓国・朝鮮に関する記述内容の調査

松下佳弘

論文要旨

在日外国人教育において日本と韓国・朝鮮の歴史的関係の学習は主要なテーマである。近年、在日外国人教育の広がりや教科書の検定基準の見直しなどにより、小学校六年社会科歴史教科書の韓国・朝鮮にかかわる記述は増え、内容も少しずつ変わってきた。そこで現在使われている教科書（五社）の記述内容（「渡来人」「秀吉の朝鮮侵略」「江戸時代の朝鮮通信使」「韓国併合」など）について調べ、あわせて一九六〇年代からこれまでにその記述内容の変遷をたどってみた。

目次

はじめに
一、現行教科書（一九九六年度版）にはどう記述されているか
(1) 渡来人
(2) 行基と大仏づくり
(3) 元寇
(4) 秀吉の朝鮮侵略
(5) 江戸時代の朝鮮通信使
(6) 韓国併合・強制連行
(7) 関東大震災と朝鮮人虐殺
(8) 戦後の歴史
(9) その他

二、これまでの教科書ではどう変わってきたか
(1) 渡　来　人
(2) 秀吉の朝鮮侵略
(3) 江戸時代の朝鮮通信使
(4) 韓国併合・強制連行

はじめに

「パクさんは韓国人なのに、どうして日本に住んでいるの？」小学校の学級の中で、在日韓国・朝鮮人の子どもが本名を使っていたり、自分が韓国人だと学級の友達に話した時、周りの日本人の子どもの中に、こんな疑問が必ずといっていいほど出てくる。

日本の公立学校の中で、在日韓国・朝鮮人の子どもに目を向けた民族差別をなくすとりくみが広がり始めて二〇年程になる。この間、全国在日朝鮮人教育研究協議会（全朝教）などの教育運動の発展と共に、関西地方を中心に各地の教育委員会が「在日外国人教育方針（指針）」を策定し、公立学校での具体的なとりくみ内容を明らかにしてきている。[1]

先の子どもの例からも分かるように、在日外国人教育において日本と韓国・朝鮮の歴史的関係の学習は重要である。各地の「方針」の中には、このことを指摘しているものも多い。「京都市立学校外国人教育方針」[2]も、その「内容」の項で正しい歴史学習の重要性を掲げている。

㈠ 日本とアジアの近隣諸国との近現代史を正しく理解させ、明治以降太平洋戦争に至る日本の侵略がこれらの国に多大な損害を与えたことを踏まえ、今日の日本がこれらの諸国との友好親善を一層進めることが大切であることを認識させる。

㈡ 日本が行った植民地政策等の歴史的事実について学習させるとともに、固有の文化をもち独自の発展を遂げた朝鮮の歴史と、古くから日本と政治、経済、文化の面で深い交流があった朝鮮の歴史が日本の歴史に大きな影響を与えたことを学習させ、日本との歴史的な関係について正しく認識させる。

現在、小学校では六年の社会科の中で「我が国の歴史」を扱うことが「学習指導要領」（文部省一九八九年七月告示・一九九二年四月全面実施）で決められており、こうした日本と韓国・朝鮮の歴史的関係の学習も当然ここで扱うことになる。では六年の社会科ではどういった内容が学習されているのか、教科書にはどう書かれているのだろうか。

近年、在日外国人教育の広がりや教科書の検定基準の見直しなどにより、六年社会歴史教科書の韓国・朝鮮にかかわる記述が増え、内容も少しずつ変わってきているという。そこで六年社会歴史教科書に書かれている韓国・朝鮮にかかわる記述内容を調べ、内容を検討してみることにした。

教科書は、文部省が告示する教科の目標や内容を決めた「学習指導要領」に基づいて、各教科書会社が執筆編集し、文部省の検定という手続きを経てできあ

がる。

戦後新しくできた社会科においてはこれまでに次のような経過で学習指導要領が改訂されてきた。[3]

一九四七・　五「学習指導要領社会科編Ⅰ（試案）」発行

五一・　七「小学校学習指導要領一般編（試案）」・「社会科編（試案）」（第一次改訂）発行

五五・一〇「小学校学習指導要領社会科編」発行（第二次改訂）

五八・一〇「小学校学習指導要領」告示（第三次改訂）↓一九六一・四　全面実施

六八・　七「小学校学習指導要領」告示（第四次改訂）↓　七一・四　全面実施

七七・　七「小学校学習指導要領」告示（第五次改訂）↓　八〇・四　全面実施

八九・　七「小学校学習指導要領」告示（第六次改訂）↓　九二・四　全面実施

教科書は新しい学習指導要領が全面実施される年度には当然全面改訂されるが、その間三年ごとに部分改訂（一九九二年度からは四年ごとに）している。（その都度文部省検定がある）各地の教育委員会がどの会社の教科書を使うのかを決める採択作業も同じように三年ごとに（一九九二年度からは四年ごとに）なされてきている。

一、現行教科書（一九九六年度版）にはどう記述されているか

現在全国で使われている小学校社会科用教科書（三年～六年）は一九九六年度に改訂されたもの（以下九六年度版と呼ぶ）である。（一九九五年二月一五日文部省検定済）前回の改訂・採択時（九二年度版）には、八種類（八社）あった教科書が、九六年度版では次の五種類（五社）になっている。

- 「新編　新しい社会6（上・下）」　東京書籍
- 「社会6（上・下）」　教育出版
- 「小学社会6年（上・下）」　大阪書籍
- 「小学生の社会6（上・下）」日本文教出版
- 「社会6（上・下）」光村図書

この五社の教科書のいずれもが、上巻は「日本の歴史」（歴史学習）、下巻は「くらしと（生活）と政治」および「世界の中の日本」という構成になっており、ここでは主に「日本の歴史」について調べることにする。検定という作業を経ているためか、各社の記述内容にそれ程大きな差はなく、韓国・朝鮮に関する項目も概ね共通する。

各教科書に共通する日本と朝鮮の歴史的関係を項目ごとに分けて、その記述内容（本文・写真・挿絵・図表）を整理し、比較してみることにする。

・各教科書についてはA社、B社、C社、D社、E社の記号で表す。
・占有率はその教科書が全国でどれくらいの割合でつかわれているか調べたものである。（出版労連調べ）
・一九九六年度版各教科書の占有率は次のようになっている。

A社……五〇・七％
B社……二七・四％
C社……一七・五％
D社……三・五％
E社……〇・九％

(1) 渡　来　人

小学校学習指導要領第二章第二節「社会」（以下「学習指導要領」とする）の「第六学年の目標及び内容」には、学習すべき「歴史上の主な事象」として一二の内容を上げている。その中の一つに「ウ　大陸文化の摂取や大化の改新、大仏造営などの様子について調べて、天皇を中心とした政治が確立していったことを理解すること。」とあり「大陸文化の摂取」を取り上げて指導すること指示している。

四世紀から五世紀頃、中国や朝鮮からの渡来した人が進んだ技術や道具を伝えたことについては、どの教科書も「渡来人」という言葉を使ってかなり詳しく紹介している。本文の小見出しも「渡来人のかつやく」（B社・C社）や「大陸の文化……伝わる／伝える／学ぶ」（A社・D社・E社）などとされ、渡来した人が技術や道具を伝えたことに重点をおいた記述になっている。どこから渡来したかについては「朝鮮半島」（A社）、「中国や朝鮮」（B社）「大陸」（C社・D社・E社）と表現が微妙に異なっている。これは「朝鮮半島」や「大陸」ではなく「中国や朝鮮」と明記すべきであろう。

A・B・Cの三社の教科書は、他の二社と比較すると、渡来人の記述にかなり重点をおいた編集をしていることが分かる。渡来人によって伝えられた進んだ技術や道具、文化について、鉄器、土器、機織り、土木技術など多くの具体例を上げ、「朝廷の役人」（C社）として「重要な仕事」（B社）をするなどこの時期に渡来人が活躍し、「くにづくりに役立」（A社）ったことがよく分かる記述内容になっている。また渡来人の伝えたものについて、どの教科書にも「のぼりがま」（A社、C社、D社）やはた織り（C社）の挿絵や「のぼりがま」を使って焼いた新しい土器の写真（A社、E社）が使われ、子どもたちが具体的なイメージを持てるようしている。B社は、欄外の「身近な地域で渡来人のあとをさがしてみよう」という項で、地名や神社の名前などになどに渡来人の跡が今なお残っている例を上げ、「身近な地域で渡来人のあとをさがしてみよう」としている。古代からの朝鮮とのつながりを子どもたちが身近に感じられる学習の試みとして注目される。

現行教科書の記述内容――渡来人――　太字は教科書の小見出し　・印は本文　＊印は写真・挿絵　〈　〉は本文以外の欄外の記述

A社

大陸から文化が伝わる　米づくりが広がったころから、朝鮮半島より日本に渡ってきて住みつく人々（渡来人）がおおぜいあらわれました。渡来人の中には、建築や土木工事、やきものなどの進んだ技術を身につけた人々がいました。鉄や青銅でできた道具を持ってきた人々もいました。これらのすぐれた技術や文化を、豪族や王たちは進んで受け入れ、くにづくりに役立てました。大和朝廷も、渡来人を朝廷のだいじな役につけて、大陸の文化を進んで取り入れました。こうして、朝廷の力はいっそう強まりました。

〈**渡来人**〉渡来人は、ほかにも生活の技術を伝えました。養蚕、はた織り、かじなどの技術や、筆、紙、酒などをつくる方法はその例です。五世紀のころからは中国から移り住む渡来人が多くなり、漢字や仏教を伝えたのも渡来人でした。

＊のぼりがま（想像図）と新しい土器（写真）

B社

渡来人の活やく　五世紀ごろから、中国や朝鮮から日本に移り住む人（渡来人）が多くなりました。これらの人々によって鉄の農具やため池のつくり方、新しい土器の作り方、養蚕や織物といった新しい技術が伝えられました。また、中国の文字（漢字）やインドの仏教も伝えられました。文字を知っていた渡来人は、朝廷の記録や外国へ出す手紙を書くなど、朝廷で重要な仕事を行いました。

〈**身近な地域で渡来人のあとをさがしてみよう**〉日本の各地には、渡来人に関係の深い地名や場所、お話などが数多く残されています。渡来人が、自分たちの出身の国名を地名や神社などの名に残したからです。例えば、埼玉県日高市にある高麗神社や、神奈川県大磯町にある高麗山、東京都狛江市などがあげられます。

C社

渡来人のかつやく　各地で古墳がつくられはじめたころから、朝鮮や中国とのいきがさかんになり、大陸から日本に移り住む渡来人が多くなりました。これらの人々は、はた織り・土器・かじ、土木・建築などでの進んだ技術や、紙・筆などのつくり方を伝えました。漢字や、儒教・仏教という新しい教えも伝えました。こうして、渡来人によって、日本の技術や文化がめだって高まりました。朝廷もこれらの渡来人をかんげいし、書記役などとしてむかえたので、朝廷の役人としてかつやくする者も多くいました。また、豪族のなかには、蘇我氏のように渡来人と結びつきを強めて、朝鮮や中国の文化をとり入れ、大きな力をもつ一族も出てきました。

＊渡来人が伝えたはた織り（想像図）

これまでの技術にくらべると、模様を織り出すなど複雑な織物が織られるようになりました。

D社

大陸の文化を伝えた人たち　古墳がつくられはじめたころから、中国や朝鮮半島とのいきがさかんになっていました。大陸の人たちの中には、戦乱をさけて日本に移り住む人々（渡来人）もふえていました。渡来した人たちは、鉄で武具や農具をつくる技術、かたい土器を焼く技術など、さまざまな新しい技術を伝えました。大和朝廷は、渡来した人たちの技術や知識を進んでとり入れ、いっそう力を強めていきました。

＊のぼりがまを使って土器を焼く（想像図）

丘の斜面を利用してつくられています。のぼりがまで焼かれた土器は、かたくてこわれにくいので、くらしの中に広まっていきました。

E社

大陸の文化に学ぶ　古墳がつくられていたころ、大陸から日本に多くの人が移住してきました（渡来人）。大きな古墳も、渡来人の指導でつくられたものといわれています。渡来人は、ほかにも、漢字、用水路やため池のつくり方、はた織りや焼き物づくりの技術などを伝えました。六世紀には仏教も伝わり、大和朝廷や豪族は、大陸の文化に学んでいきました。

＊大陸から伝わった高温で焼ける新しいかまで焼いた土器（写真）

＊渡来人が伝えた土器づくり（想像図）
しゃ面を利用してかまをつくり、高温で焼くため、それ以前の土器よりもわれにくく、じょうぶな土器ができるようになりました。

(2) 行基と大仏づくり

学習指導要領の「内容」ウの項に「大仏造営」が上げられており、どの教科書も東大寺の大仏づくりについて、ほぼ共通して見開きの二ページをあてている。「大仏をつくる技術は、渡来人の子孫が指導」（E社）したという記述内容もほぼ同じである。行基については、学習指導要領の「内容の取扱い」「ウ」の項で「取り上げて指導する」べき人物（四二人）の中に入っており、どの教科書にも紹介されている。しかし行基が渡来人の子孫であることに触れているのはB・C・Eの三社である。

現行教科書の記述内容――行基と大仏づくり――

A社	B社	C社	D社	E社
・大仏をつくる技術は、朝鮮からの渡来人の子孫が伝えたものです。	・さらに、すぐれた技術をもつ朝鮮からの渡来人の子孫を、〈大仏づくりの〉工事の責任者に任命しました。	・行基は、渡来人の子孫で……〈大仏づくりの工事の指導をしたのは、渡来人の子孫でした。かれらは、	〈聖武天皇は、渡来した人の子孫を〈大仏づくりの〉指導者に任命しました。〉	〈行基は渡来人の子孫でした。〉 ・金属の大仏をつくる技術は、渡来人の子孫が指導しました。

〈行基は、渡来人の子孫として現在の大阪府に生まれました。〉	すぐれた技術を用いて、大きな役割を果たしました〉		

(3) 元　寇

一二七四年と一二八一年のモンゴル帝国（元）の日本侵略についてはどの教科書も二ページを割き、各社とも元軍の高麗からの進路を示す地図と元軍と戦う竹崎季長を描いた絵図を載せ、戦いの様子を紹介している。ここでは、戦いの様子や元軍が「二度とも暴風雨に」（A社）あって引き上げたことだけでなく、高麗についての記述が欲しい。かつて旗田巍氏が高等学校の教科書の批判したように(注1)、高麗や東アジアの人々の元にたいする抵抗運動が元の日本侵略の失敗の要因になったことは、小学生が当時の日本と朝鮮や東アジアとのつながりに目を向けるのには適切な歴史的事象ではないだろうか。C社とE社はこのことに触れた記述をしている。各社とも元軍の高麗からの進路を示す地図を掲載しているので、その説明としてもこの記述は必要である。なお「元軍には、元にしたがった朝鮮半島の人々もいました」（D社）という記述は、かつて「元・高麗軍」という教科書記述があったように(注2)、補足説明がいるのではないだろうか。

(注1)　旗田巍氏は高等学校の教科書のこの部分について次のように批判している。「（高麗は）とくに一二三一年からおよそ三〇年間にわたるモンゴルの侵略に対しては、大変な被害を受けながらも、農民軍を含め熾烈な反モンゴル運動をたたかいぬいた。こうした戦いのあり様を教科書は記述すべきである。しかもこれは朝鮮史だけでなく、日本史上における一二七四・八一年の『蒙古来襲』との関連で重要である。なぜなら元の日本侵攻がこの時期までのびたということ、あるいは日本の被害がすくなくてすんだということは、高麗の抵抗のおかげであった。元のフビライはもっとはやい時期から日本征服の野心をもっていたが、高麗の抵抗で延期せざるをえなかった。そういう点でも、高麗のモンゴル侵略にたいする抵抗ははっきり書くべきであろう。」（旗田巍「世界史教科書にみる朝鮮」『季刊三千里』第一四号一九七八年）

(注2)　「このときは、元・高麗軍の上陸をふせぐために、博多湾の沿岸に石がきが築かれ、武士たちも相手の船に乗り移って戦いました。」（大阪書籍「小学社会6年(上)」一九九二年度版 P39）

現行教科書の記述内容――元寇――　〈各社とも元軍の高麗からの進路を示す地図を掲載〉

A社	B社	C社	D社	E社
（朝鮮（高麗）についての記述なし）	（朝鮮（高麗）についての記述なし）	〈元は三度目の侵略を計画しました。〉しかし、中国・朝鮮などの人々の元に対する抵抗や、元の皇帝の死によって、その計画は中止されました。〉	・元の軍には、元にしたがった朝鮮半島の人たちもいました。	・その後、中国や朝鮮、ベトナムで元に対する抵抗が起こるなどしたため、元が日本にせめてくることはありませんでした。

(4) 秀吉の朝鮮侵略

秀吉の朝鮮侵略（一五九二年）までは、日本と朝鮮との関係は、友好的に続いてきた。しかし教科書には、遣新羅使や遣勃海使、室町時代の朝鮮への使節（日

本国王使）など朝鮮との交流についての記述はない。「渡来人」から以降、遣隋使、遣唐使や鑑真などの中国以外の東アジアとの交流にふれる記述がほしい。

秀吉の朝鮮侵略については、九二年度版と比べて各社とも、記述内容や写真などの資料も増えており、三社の教科書が「侵略」という用語を使っている。いずれの教科書にも、秀吉が中国（明）を征服しようとして朝鮮に大軍を送ったことが書かれている。しかし、二社の教科書には、それに加えて「（明への）案内を命じた朝鮮が断ると……大軍を送りました」（D社）や「朝鮮にしたがうように命令しました。これが断られると……朝鮮をせめさせました」（E社）という記述がある。これは侵略の原因が、朝鮮が案内や命令を断ったことにあるかのような表現で問題である（注3）。

戦いの様子については、どの教科書も「朝鮮の人々の反撃」（A社）や「朝鮮の人々ははげしく抵抗し」（B社、D社、E社）、「秀吉が死ぬと兵を引き上げました」（C社）などの記述で、朝鮮側の抵抗について明記している。

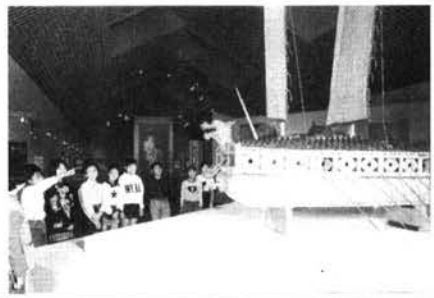
秀吉の朝鮮侵略は「人さらい戦争」「焼きもの戦争」ともいわれように、各地の大名たちによって多くの朝鮮人が日本に連行された。現行の教科書はどれも本文や写真の解説文で、この朝鮮人陶工を取り上げている。これまでの教科書では取り上げられたことはほとんどなく、九六年度の教科書改訂の特徴のひとつといっていいだろう。さらにその朝鮮人陶工によって「すぐれた技術が日本に伝えられ……有田焼はその代表的な例」（B社）であることや有田焼の「李三平の碑」の写真（C社）などを取り上げ、秀吉の朝鮮侵略が今につながっていることを考えさせるようになっている教科書もある。また、朝鮮側の戦い様子の紹介として、李舜臣像（E社）や朝鮮水軍の亀甲船（B社、C社、E社）が初めて取り上げられ、近隣アジア諸国との協調を意識した編集になっている。

（注3）これについて李進熙氏は一九七九年に「『仮道入道』をうけつぐ戦後教科書」として高等学校の日本史教科書の記述を批判している。（李進熙「秀吉の朝鮮侵略と家康の善隣外交」『教科書に書かれた朝鮮』講談社一九七九）

現行教科書の記述内容――秀吉の朝鮮侵略――

A社	B社	C社	D社	E社
・やがて秀吉の野心は、海外に向けられるようになり、中国（明）を征服しようとして、二度にわたって朝鮮に大軍でせめこみました。この侵略で国土は破かいされ、多くの朝鮮人が殺害されたり、日本に連れてこられましたりしました。しかし、朝鮮軍と朝鮮の人々の反撃や、明の援軍によって退けられ、秀吉はその最中、大阪城で病死しました。	・また、秀吉は、中国を征服しようとして、二度も朝鮮に大軍を送ってせめこみました。これに対して、朝鮮の人々は、中国からの援軍とともに、はげしく抵抗しました。やがて、秀吉軍は行きづまり、秀吉が病気で死ぬと、兵を引き上げました。この戦いの時に、二万人以上といわれる多数の朝鮮の人々が日本に連行されました。その中には、朝鮮の陶磁器をつく	**朝鮮侵略**　国内を統一した秀吉は、次に中国（明）をしたがえようと考え、二回にわたって朝鮮に大軍を送りこみました。しかし、朝鮮軍と中国の援軍や朝鮮の民衆のはげしい抵抗にあいました。戦いにつかれた大名たちは、秀吉が死ぬと兵を引き上げました。秀吉の朝鮮侵略は、朝鮮の人々に多くのぎせい者を出し、朝鮮の国土をあらしました。また、豊臣氏の力がおとろえるきっかけにも	秀吉は、中国（明）を征服しようとし、案内を命じた朝鮮がことわると、二回にわたって大軍を送りました。侵略された朝鮮の人びとははげしく抵抗しました。この戦いで、朝鮮の国土はあらされ、また、すぐれた陶工が日本に連れて来られました。	・秀吉は、中国（明）の征服を考え、まず朝鮮にしたがうよう要求しました。これが断られると、秀吉は大名に命じ、二度も朝鮮をせめさせました。朝鮮の人々ははげしく抵抗し、水軍の活やくと明の援軍により、秀吉の軍を退けました。しかし、多くの人々が殺され、学者や焼き物の技術者が日本に連れ去られるなど、朝鮮の人々は大きな被害を受けました。

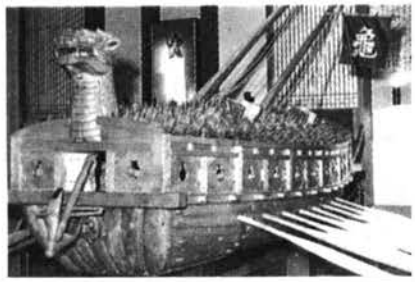
＊日本と朝鮮の関係を知る歴史博物館（佐賀県・名護屋城博物館）（写真）博物館には、秀吉の朝鮮侵略を調べる子どもたちがおとずれます。



＊日本の陶磁器（写真）―豊臣軍が朝鮮から連れ帰った焼き物の技術者によって、新しい陶磁器がつくり出されました。各地に今も伝えられています。

る陶工がいて、すぐれた技術が日本に伝えられました。佐賀県の有田焼は、その代表的な例です。

＊朝鮮の海軍の船（写真）この船は亀甲船とよばれ、朝鮮軍は、この船を使って、秀吉軍を苦しめました。



なりました。

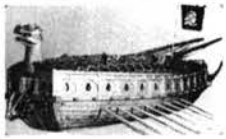
（連れてこられた朝鮮人陶工） 朝鮮を侵略した諸大名は、朝鮮から多くの陶工を日本へ強制的に連れてきて、自分の領内で陶磁器をつくらせました。

＊李三平の碑

強制的に連れてこられた朝鮮人陶工の一人の李参平は、有田（佐賀県）で有田焼をはじめました。

＊朝鮮の城をせめる日本軍（写真）

＊朝鮮の軍船（写真）この軍船を用いた朝鮮の水軍は、日本の水軍をやぶりました。



＊亀甲船（写真）（復元模型）朝鮮軍は、この船を使って、秀吉軍を苦しめました。

＊李瞬臣像（韓国）（写真）日本軍をやぶった朝鮮水軍の指導者

＊亀甲船（写真）朝鮮水軍の船で、亀の甲のように甲板上部がおおわれています

(5) 江戸時代の朝鮮通信使

徳川家康は秀吉の朝鮮侵略で途絶えていた朝鮮との国交を回復した。「鎖国」の時代に一二回も日本を訪れた朝鮮通信使は日本と朝鮮の関係や交流の様子が小学生にも具体的にわかるできごとである。しかし、通信使が小学校の教科書に取り上げられるようになったのはつい最近のことである。

今回の改訂で、どの教科書もカラー写真の「朝鮮通信使の行列図」を載せ、記述も詳しくなっているが、教科書によって取り扱い方がずいぶん違う。写真なども含めて多いものでは一ページ、少ないもので一／四ページのスペースを取っている。記述の少ないD社を除いた四つの教科書では、朝鮮との国交が秀吉の朝鮮侵略から途絶えていたこと、朝鮮通信使が鎖国の時代にあって外国との文化交流の場であったことにふれ、岡山県牛窓町に伝わる「唐子おどり」の写真（A社、B社、C社）を載せている。特に、A社の教科書は本文の記述も多く、朝鮮通信使の行程の地図をのせ、「地域に見る国際交流を探そう」という項で京都の「唐人雁木」や「伏見人形」などの通信使の跡を紹介している。この時代の国際交流という観点から、朝鮮通信使を重点的に取り上げていることがわかる。これは小学校での日本と朝鮮の歴史的関係の学習のこれからの方向を考える上で、示唆にとんだ扱いである。一方、E社の教科書は、対馬藩に焦点をあてた記述で、雨森芳洲の写真をいれて紹介し、他と違った特色ある扱いをしている。

現行教科書の記述内容——江戸時代の朝鮮通信使——

A社	B社	C社	D社	E社
•朝鮮との交流は、豊臣秀吉が朝鮮を侵略してからは、朝鮮から断られていました。上の絵は、江戸時代におとずれた使節団の行列です。朝鮮通信使とよばれたこの使節を、人々はどんな気持ちでむかえたのでしょうか。家康は、朝鮮との関係を回復させようと努力しました。それによって、ようやく平和なつきあいに回復させることができました。やがて、将軍が代わるごとに、朝鮮からお祝いと友好を目的とした五〇〇人もの大使節団がおとずれました。朝鮮通信使は、朝鮮や中国の文化をもたらし、また、日本は、日本の文化を伝えるなど、江戸時代を通じて両国の交流をはかりました。	•一方、秀吉の侵略で中断していた朝鮮との国交は回復され、朝鮮からは四〇〇～五〇〇人の使節が一二回にわたって江戸をおとずれました。一行は、各地で歓迎され、使節団の中の学者や医者などにきそって面会し、朝鮮や中国の政治や文化を学ぼうとする人々もいました。この使節団は、鎖国を始めた日本に大きなえいきょうをあたえました。 ＊岡山県に伝わる唐子おどり（写真） この踊りは、朝鮮の使節団から伝えられたといわれ、現在も続けられています。朝鮮ふうの衣装を着	•また、幕府は、秀吉の朝鮮侵略以来とだえていた朝鮮との国交を回復しました。 ＊江戸をおとずれた朝鮮からの使節（写真）	•このころ、日本が正式に国交を結んで交流していたのは、朝鮮だけでした。朝鮮の使節（朝鮮通信使）も、将軍がかわるごとに日本にきて、朝鮮や中国の文化を伝えました。	•秀吉の朝鮮侵略の後とだえていた朝鮮との国交は対馬藩（長崎県）の努力によって回復し、将軍がかわるごとに使節（朝鮮通信使）がおとずれるようになりました。対馬藩では、朝鮮に日本の使節用の建物をおき、交流と貿易を行いました。 ＊福善寺（広島県福山市）（写真） この寺の右側の部分の建物は「対潮楼」といい、朝鮮通信使がきたときに宿舎になりました。

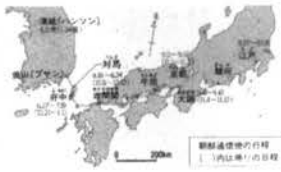
＊朝鮮通信使の行列（写真）

おとずれたところでは大歓迎を受けました。江戸の日本橋あたりの様子です。

＊牛窓の唐子おどり（写真）

岡山県の牛窓町の「唐子おどり」は朝鮮通信使がこの牛窓でたびたび休んでいることから、その一行が朝鮮から伝えたのではないかといわれています。

＊朝鮮通信使の行程（地図）



（注）別のページに「地域に見る国際交流を探そう」という発展学習を促す項を設け、京都の伏見に残る、朝鮮通信使にかかわる『唐人雁木旧趾』や『伏見人形』を取り上げている。

た二人の男の子による踊りです。

＊朝鮮からの通信使の一行（写真）

＊唐子おどり（写真）

朝鮮からの使節は、江戸時代を通じて一二回来日し、江戸だけでなく道中各地でも、日本人が一行とふれあい、鎖国のもとでの文化交流がおこわれました。その一つに岡山県牛窓町には、朝鮮風の衣装をまとった唐子おどりという行事が今に伝えられています。

＊朝鮮通信使（写真）

＊朝鮮通信使（写真）

＊雨森芳洲（写真）

芳洲は、対馬藩の学者で朝鮮通信使の通訳をした人です。自分の経験から、外国との、おたがいを尊重したつきあいがたいせつなことを書き残しています。

(6) 韓国併合・強制連行

在日韓国・朝鮮人の子どものいる学級での「韓国併合」の授業で、侵略の事実について深く教えれば教えるほど在日の子どもは下を向いてしまうという体験を持つ教員は多い。また、日本の学校の歴史の授業で「韓国併合」のところがいやでたまらなかった、という話を在日韓国・朝鮮人からも聞くこともよくある。圧倒的多数の日本人のなかで「遅れている朝鮮」「弱い朝鮮」という歪んだ歴史観が根底にある授業を受けている在日韓国・朝鮮人の子どもの存在やその意識に、多くの教員は長い間目を向けることはなかった。

一方、韓国併合や強制連行など日本の近隣アジア諸国に対しての「侵略」や植民地支配を教科書がどのように扱うかについては、近隣アジア諸国との関係や日本人の歴史認識の問題としてたびたび取り上げられてきた。なかでも一九八二年、日本軍の「侵略」を「進出」に書き換えるなどした高校の歴史の教科書検定は、中国、韓国などが外交ルートにより抗議するなど、内外で大きな問題となった（注4）。

その結果、「教科書検定基準」に「近隣のアジア諸国との間に近現代の歴史的事象の扱いに国際理解と国際協調の見地から必要な配慮がなされていること」という項目が追加された（注5）。

この頃から、小学校の歴史教科書にも侵略の事実についての記述は少し増えてきている。最近では教科書の編集にあたって担当者は「文部省からの指導もあり、近隣アジア諸国に配慮した記述をするようにしている」という。（教科書の編集担当者の話）

以上のような背景もあり、九六年度版の教科書には韓国併合について、多いもので二ページ、少ないものでも一ページをあて、かなり詳しく記述され、「韓国併合」（C社、E社）、「韓国を併合する」（D社）、「戦争のかげで」（B社）「朝鮮の人々の苦しみ」（A社）などの小見出しをつけて、独立した扱いになっている。強制連行については、この後の太平洋戦争の記述の中でふれている。

土地調査事業、土地を失った農民の日本や中国東北部への移住、そこで過酷な労働、皇民化教育についてはどの教科書にも書かれており、四社が創氏改名にもふれている。また、韓国併合に対する朝鮮の人々の抵抗運動についてはどの教科書にも記述され、三・一独立運動の記述が三社、二社の教科書が安重根の伊藤博文殺害にふれている。特にC社は、三・一独立運動に½ページをあて、柳寛順（ユクアンスン）の活動を大きく紹介している。このように、各教科書とも植民地支配の実態に詳しくふれるだけでなく、これに反対する朝鮮の人々の戦いについても大きく扱われているのが特徴である。

またこの頃から日本人の間に朝鮮人を差別する意識が広がったことも三社の教科書に書かれている。

A社とD社は、ネールの「父が子に語る世界歴史」の中から、アジアの人から見た日露戦争についての文を載せている。アジアの人たちは韓国併合をどう見ていたかという違う視点を子どもたちに示唆する適切な資料といえる。

教科書の欄外には子どもの思考を促すような投げかけのコメントが書かれており教科書の編集の意図がわかる。韓国併合の部分に書かれているものをあげてみる。

- 植民地とされた朝鮮の人たちは、日本をどのように考えたか話し合って見よう（A社）
- 中国や朝鮮の人々は、どうなったのだろう。（B社）

・当時の日本人は、朝鮮の人々のいかりや悲しみが理解できなかったのかな（C社）
・日本に併合された韓国の人たちは、どんな気持ちだったでしょう（D社）
・朝鮮の人々には、どのようなことをしたのだろうか（E社）

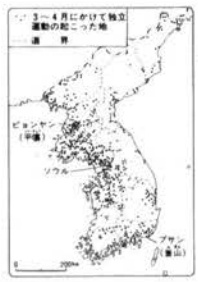
（注4）「『教科書検定』を外交問題に」（毎日新聞一九八二年七月二七日）
（注5）「文部省告示第一五一号（昭和五七年一一月二四日）『文部省広報（同日付）』」

現行教科書の記述内容――韓国併合・強制連行――

A社	B社	C社	D社	E社
朝鮮の人々の苦しみ　日露戦争は、アジアの国が、ヨーロッパの国と戦ってはじめて勝った戦争でした。このことから、アジアの人々や、植民地の独立運動を進めていた人々は大きなしげきを受けました。しかし、日本は、ロシアと講和条約を結ぶと、朝鮮（韓国）を支配する役所を置きました。日本のこのような行動に対して、「朝鮮の独立をふみにじるものだ。」として、朝鮮の人々は全土で抵抗しました。日本はこの抵抗を軍隊の力でおさえ、一九一〇年（明治四三年）、とうとう朝鮮を日本の植民地とする条約を結ばせました（韓国併合）。「韓国を治めるすべての権限を、永久に日本にゆずりわたす」という内容の条約が発表されると、その無念さをなげく声が、朝鮮に満ちあふれました。植民地にされると、土地整理という名で、多くの土地が日本人のものになりました。土地を失った朝鮮の人々は、小作人となったり、日本や中国の東北部に	**戦争のかげで**　また、二つの戦争の戦場となった朝鮮・中国の人々は、命をうばわれたり、家を焼かれたりして、大きな被害を受けました。しかし、日本は、朝鮮の人々の強い反対をおし切って一九一〇（明治四三）年、朝鮮をへい合し、植民地にしました。植民地になると、朝鮮の人々の中には、土地をうばわれ、小作人になる農民が増えました。生活にこまった多くの朝鮮の人々は、日本にわたり、鉱山などできびしい労働をしました。また、朝鮮の学校では、日本語や日本の地理・歴史が教えられるなど、日本国民となるための教育が行われました。これに対して、一九一九（大正八）年、朝鮮の人々は独立運動に立ち上がり、運動は、またたくまに朝鮮の全土に広がっていきました。このころから、日本人の間には、朝鮮や中国の人々を軽べつし、差別する意識が強まっていきました。	**韓国併合**　日露戦争後、日本は韓国に勢力をのばし、韓国の外交や政治の権利をうばって支配を強めました。これに対して韓国では、日本の支配に反対する民衆が各地で立ち上がり、はげしい抵抗運動をおこしました。日本は、一九一〇年（明治四三年）、ついに韓国を併合し、植民地とし日本の領土にしました。そして、警察や軍隊を朝鮮（韓国）のすみずみにまで配置して、抵抗運動をおさえようとしました。併合後の朝鮮では、農民の田畑が安いねだんでつぎつぎと日本人に買い取られ、くらしにこまる人が多くなりました。土地を失った人々は、仕事を求めて満州や日本に移り、安い賃金で土木工事や炭鉱などの危険な仕事につきました。また、朝鮮の学校では日本語で日本の歴史が教えられるなど、朝鮮の人々は、民族としてのほこりを深くきずつけられました。そして、一九一九年（大正八年）三月一日、朝鮮の独立をめざす人々が立ち上がりま	・条約改正を達成した年の一年前・日本は韓国を併合し植民地にしてしまいました。 **〈韓国併合のときの条約〉** 第一条　韓国皇帝陛下は、韓国全部についてのいっさいの統治する権利を、完全に、永久に、日本国皇帝陛下にゆずりわたす。（一部をやさしく書きなおしたものです） ＊朝鮮の伝統的な学校 儒学を学んだ先生が、子どもたちに教えています。 	**韓国併合**　日露戦争の後、日本は朝鮮半島に対する支配を強め、ついに一九一〇（明治四三）年、人々の反対をおしきって植民地としました（韓国併合）。朝鮮の学校では、日本語と日本の歴史が教えられ、日本国民とするための教育が行われました。日本が土地を調査する中で、多くの土地が日本人のものにされました。土地を失った人々の中には、満州や日本に移住して生きていかなければならなくなった人々もいました。日本人の間には、朝鮮の人々を差別するあやまった意識が強くなりました。 **〈朝鮮の独立運動〉**　日本の支配に対し、朝鮮の人々は抵抗運動を続けました。一九〇九（明治四二）年には、朝鮮に対する日本の責任者伊藤博文が、独立運動家に殺されました。一九一九（大正八）年の三月一日には、朝鮮の全土に広がる独立運動が起きるなど、強い

移住したりして生きていかなければなりませんでした。また、学校では日本語で学ばなければならず、民族としてのほこりをきずつけられました。そして、このころから、日本人の間に、朝鮮人や中国人をけいべつするあやまった見方が広まりました。しかし、朝鮮の人々は、こののちも独立のためのたたかいをねばり強くつづけていきました。

〈日露戦争についてのアジアの人のおもい〉 日本の勝利はアジアのすべての国々に大きなえいきょうをあたえた。たくさんのアジアの少年少女、そして大人が、同じように感激した。ヨーロッパの一大強国がやぶれた！ だとすれば、今でも昔のようにアジアはヨーロッパを打ち破ることができるはずだ。〝アジア人のアジア〟のさけび声がわきあがった。ところが、その結果といえば、アジアを侵略して植民地している欧米諸国の一員に、もう一つの国が加わったというだけだった。そのような苦しい目に、最初にあわされたのは、朝鮮だった。



＊朝鮮で独立運動の起こった地域（地図）

・人手が不足するようになると、約七〇万人の朝鮮人、約四万人の中国人が強制的に日本に連れこられ、各地の鉱山などできびしい労働をさせられました。政府は、朝鮮人に対して、名前を日本式に変えることや、神社にお参りすることを強制しました。また、朝鮮にも徴兵令を出して、多くの男性を日本軍の兵士として戦場へ動員しました。若い女性も、工場などにかりだされました。

した。（三・一独立運動）。この運動は朝鮮全土にひろがり、その後の朝鮮独立運動の出発点になりました。

〈抵抗運動と伊藤博文〉 抵抗運動がはげしくなると、日本の朝鮮支配の実現に重要な役割を果たした伊藤博文が、一九〇九年に朝鮮の青年に射殺される事件もおこりました。

〈安い賃金〉 同じ仕事をしても、日本人の半分ほどの賃金しかはらわれませんでした。

〈三・一独立運動〉 一九一九年三月一日、朝鮮の独立をめざす人々が、ソウルで独立宣言文を発表しました。そして、そのとき集まった数千人の民衆は、「独立ばんざい」さけんで行進を行いました。当時一五歳の女学生 柳寛順は、独立運動に参加し、独立宣言文を持ってふるさとに帰りました。そして、町や村をまわってソウルでの独立運動のようすを話し、人々に独立運動に立ち上がるよう、うったえました。柳寛順のような人々の活動によって、二〇〇万人もの人々が参加する運動に発展しました。これに対して日本は、警察や軍隊を動員してこの運動をおさえようとしました。そのため八〇〇〇人にのぼる朝鮮の人々が死にました。日本軍にとらえられた柳寛順は、「日本人に、わたしたちをさばく権利は

韓国を併合する 日露戦争のあと、日本は、いまのソウルに役所をおいて、韓国（朝鮮）に対する支配を強めました。韓国の人たちは、広く反対運動をおこし、一九〇九年には、伊藤博文が韓国の青年安重根に殺される事件がおこりました。日本は、抵抗する人びとを武力でおさえ、一九一〇（明治四三）年、韓国を併合して日本の植民地としました。韓国を併合すると、日本は韓国を朝鮮とよんできびしく支配しました。土地を失った多く人たちは、仕事をもとめて日本や満州に移住したりしました。日本人の間にも、韓国の人たちを差別する気持ちが広がっていきました。のちには、学校で日本語の時間を強制して母国語教育の機会をうばったり、姓名を日本式に変えさせたりしました。

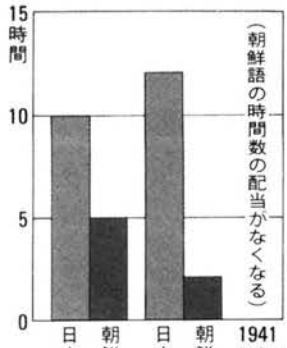
〈アジア人から見た日露戦争〉 日本の勝利はアジアのすべての国々にに大きな影響をあたえた。私は、どんなに感激したか。……ヨーロッパの一大強国が敗れた。国々にに「アジア人のアジア」のさけびがおこった。……ところが、その後のようすは、アジアを侵略する国のグループに、日本をつけ加えただけだった。そのにがい結果を最初になめたのは、朝鮮であっ

抵抗が続きました。

＊朝鮮で使われていた日本の教科書（写真）

＊日本語で教育される朝鮮の子ども（写真）

・さらに多くの朝鮮の人々や占領地の中国の人々は、強制的に日本につれて来られ、労働力が不足していた鉱山や工場などで、ひどい条件のもとで働かされました。（強制連行）



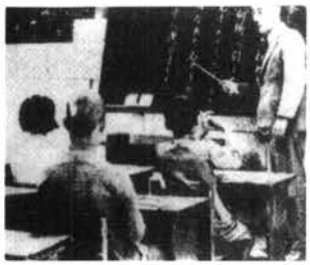
＊なくなる朝鮮語の時間（棒グラフ）

＊日本語で教育される朝鮮の子どもたち

・戦争が長びき、日本に働き手だ少なくなってくると、多数の朝鮮人や中国人を強制的に連れてきて、工場や鉱山などで、ひどい条件のもとで、きびしい労働にあたらせました。このため、多数の朝鮮人、中国人がなない。罪人としてさばかれなければならないのは、日本人だ。」と、裁判の席で述べました。

＊ソウルの公園にかざられている三・一独立運動の碑（写真）

＊日本語で授業を受ける朝鮮の子どもたち。（写真）



＊日本の支配に抵抗する朝鮮の人々（写真）

日本に軍隊を解散させられた韓国た。（ネール「父が子に語る世界歴史」の一部をやさしく書きなおしたものです。）

＊なくなる朝鮮語の時間（棒グラフ）

＊朝鮮で使われた国史（日本の歴史）の教科書（写真）

＊併合時代の韓国の小学校のようす（写真）―子どもたちは、日本語を「国語」、日本の歴史を「国史」として習わされました。

〈朝鮮の人々にあたえた苦しみ〉

朝鮮の人々には強制連行だけでなく、氏名を、日本人と同じものに変えさせるなど、大きな苦しみをあたえました。

くなりました。さらに、朝鮮人に対して、姓名を日本式の氏名に変えさせるなど、たえがたいことを強制しました。

＊九州の炭鉱で働く朝鮮人少年労働者（写真）

の兵士は、農民とともに武器を持って立ち上がり、各地で日本の支配に抵抗しました。

・朝鮮では、朝鮮の人々の姓名を日本名に改めさせたり、徴兵制をしいたりするなど、たえがたいことを強制しました。戦争が長びくと、日本の国内では、働き手が少なくなりました。そこで、約七〇万人の朝鮮の人々や、約四万人の中国の人々を日本へ強制連行してきて、各地の炭鉱や工場などで、ひどい条件のもとに働かせました。

＊強制連行されて働かされる朝鮮の人々（写真）

警察官がかんとくしています。

・いっぽう朝鮮や中国から多くの人たちが日本に強制的に連れてこられ、鉱山などで、ひどい環境ときびしい監視のもとで働かされました。

(7) 関東大震災と朝鮮人虐殺

一九二三年の関東大震災の中で起こった朝鮮人虐殺の背景には、韓国併合後から日本人の中につくられてきた朝鮮人にたいする差別意識と日本の植民地支配に対する朝鮮の人々の抵抗への恐れがあったといわれている。教科書では、米騒動、労働運動、全国水平社の運動などの記述と前後した中で扱われている。各社の記述内容に大差はないが、虐殺した人について、「日本人によって」が二社、「(うわさを)信じた人々や警察、軍隊によって」が三社となっている。また、虐殺された人についても「多くの朝鮮人や中国人」、「数千人の朝鮮人」、「数千人の朝鮮の人々や社会運動の指導者」と多様である。虐殺の背景にある差別意識については二社の教科書がふれている。

現行教科書の記述内容――関東大震災と朝鮮人虐殺――

A社	B社	C社	D社	E社
・一九二三年、関東南部に大地震がおこったとき、その混乱の中で、朝鮮人が暴動を起こすというわさが流され、日本人によって、多くの朝鮮人や中国人が殺害されるという事件がおこりました。朝鮮人や中国人に対する差別意識がそのもとでした。	**[関東大震災のもとでの悲劇]** ・一九二三年九月一日の午前一一時五八分、はげしい地震が、関東地方をおそいました。(中略) この大震災の中で、「朝鮮人が暴動を起こす。」などというわさが、警察などによって広められました。これを信じた人々や警察・軍隊によって、何の罪もない数千人の朝鮮人が殺されました。	・そのうえ、一九二三年(大正一二年)には、関東地方に大地震がおこって大きな被害が出ました。この時、「朝鮮人が放火をしている。」などというまちがったうわさがおこり、それが警察などによってひろめられ、これを信じた人々や警察・軍隊によって、数千人の朝鮮の人々や社会運動の指導者が殺されました。この事件は、朝鮮の人々に対する政府や日本人の差別意識と抵抗への恐れが生み出したものといわれています。	・一九二三年(大正一二年)九月一日、関東南部を中心に大地震がおこり、東京・横浜などは、大きなひ害を受けました。多くの人たちが命を落とし、家を失いました。この混乱の中で、「朝鮮人が暴動を起こす」などのうわさが流れ、日本人によって、数千人もの朝鮮人が殺されるという悲しい事件もおこりました。	**[関東大震災]** 一九二三(大正一二)年九月一日、関東地方を大きな地震がおそい、東京では約一〇万人もの人がなくなりました。地震の後の混乱の中、「朝鮮人が暴動を起こす。」というあやまったうわさが流れ、警察や軍隊、うわさを信じた人により、数千人の朝鮮の人々が殺されました。また、社会運動の指導者なども、混乱の中で弾圧を受けたり殺されたりしました。

(8) 戦後の歴史(朝鮮戦争・国交の回復)

一九四五年八月の敗戦で朝鮮は日本の植民地支配から解放された。戦後の歴史では、朝鮮戦争で二つの国に分かれて戦ったことや大韓民国や朝鮮民主主義人民共和国との国交について各社とも共通して書かれている。しかし、韓国合併・強制連行の記述に比べてその結末の記述はほんのわずかである。いずれも朝鮮戦争の所で「独立した朝鮮は」(B社)「日本から解放された朝鮮では」(C社)と書かれているだけである。さらに韓国併合の後、日本に移り住んだり、強制連行で連れてこられたりした朝鮮の人々が敗戦後どうなったかについてはなにも記述されていない(注6)。一方、下巻の教科書では、どれも「くらし(生活)と政治」の単元で、在日韓国・朝鮮人に対する差別が今なお見られることを簡単に指摘している。日本の学校で多くの在日韓国・朝鮮人の子どもが学んでいる中で、教科書の戦後の歴史に、在日するようになった経過についての記述がどうしても必要である。

（注6）下巻の「世界の中の日本」の中で「大韓民国の人々の生活」の項に次のような記述をしている教科書がある。「一九一〇年（明治四三年）、日本は朝鮮半島を植民地とし、第二次世界大戦中には、多くの朝鮮の人々を戦地に送ったり、炭鉱などの仕事をさせるため強制的に日本へ連れてくるなど、たいへんな苦しみをあたえました。今もそのときに連行された人々や、その子孫の人々が日本に住んでいます。」（「小学社会6年下」大阪書籍一九九六年度版 P41）

現行教科書の記述内容――戦後の歴史

A社	B社	C社	D社	E社
・（アメリカとソ連の）この対立がもとで、朝鮮半島では、南の大韓民国（韓国）と北の朝鮮民主主義人民共和国とに共和国（北朝鮮）との間に、同じ民族が戦う朝鮮戦争がおこり、アメリカや中国も加わって、はげしい戦争となりました。 **〈大韓民国（韓国）と朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）〉** 日本の植民地とされていた朝鮮は、第二次世界大戦後、一つの国として独立することになっていましたが、アメリカとソ連の対立のもとで、南北二つの国に分けられてしまいました。 ・また、アイヌ民族に対する差別やへん見をなくすこと、在日韓国・朝鮮人をはじめとした外国人への差別をなくすことは重要な課題です。	・また、独立した朝鮮は、大韓民国と朝鮮民主主義人民共和国とに分かれ、一九五〇年に両国の軍隊がしょうとつして、朝鮮戦争が起りました。 **〈平和条約の主な内容〉** ・日本は朝鮮の独立を認める。 **〈大韓民国（韓国）と朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）との国交〉** 韓国とは、一九六五年に条約が結ばれて国交が開かれていますが、北朝鮮とは国交が開かれていません。	・そのえいきょうを受けて、朝鮮では、南の大韓民国（韓国）と北の朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）との間に戦争がおこり、一つの民族が二つに分かれて戦いました（朝鮮戦争）。 **〈大韓民国と朝鮮民主主義人民共和国〉** 第二次世界大戦後、日本から解放された朝鮮では、アメリカの援助で南部に大韓民国が、ソ連の援助によって北部には朝鮮民主主義人民共和国がつくられました。 ・また、朝鮮民主主義人民共和国とはまだ国交が開かれていません。	・（アメリカとソ連の）この対立がもとで、日本の近くで朝鮮戦争がおこりました。 **〈平和条約の主な内容〉** 朝鮮の独立を認め、台湾などを放棄する。 ・大韓民国とは一九六五年に国交を結びました。最近では朝鮮民主主義人民共和国とも国交を結ぼうという動きが強まっています。	・日本の支配から解放された朝鮮半島では、大韓民国と朝鮮民主主義人民共和国ができ、一九五〇（昭和二五）年に戦争になりました。（朝鮮戦争）この戦争には、アメリカや中国も加わり、朝鮮半島全土にわたってはげしい戦いがくり広げられました。 ・一九六五（昭和四〇）年、大韓民国との間に日韓基本条約が結ばれて、国交が開かれました。朝鮮民主主義人民共和国との国交はまだ開かれていませんが、国交回復の努力が続けられています。

(9) その他（下巻・「くらし（生活）と政治」「世界の中日本」）

教科書の下巻は、「くらし（生活）と政治」および「世界の中の日本」という単元になっており、ここにも韓国・朝鮮に関わる記述内容がある。本論のテーマとかかわる部分もあるので簡単に整理してみる。

「くらし（生活）と政治」の中ではどの教科書も在日韓国・朝鮮人にたいする差別や偏見があることに簡単にふれている。特にC社は在日韓国・朝鮮人であることを理由にマンションへの入居をことわったことが違法であるという判決について報じた新聞記事の写真を載せている。

また、「世界の中の日本」では、日本とつながりの深い国をあげて生活の様子を紹介している。参考までに各社の教科書が取り上げていく国をあげてみる。（国名については教科書の表記通り）A社…アメリカ、中国、サウジアラビア。　B社…アメリカ合衆国、中国、タイ　C社…アメリカ合衆国、フランス共和国、中華人民共和国、大韓民国。D社…アメリカ合衆国、中国、オーストラリア。E社…アメリカ合衆国、サウジアラビア王国、中華人民共和国。

C社の教科書は大韓民国の紹介に四ページをあて、「日本と朝鮮半島とのかかわり」を示す年表や子どもたちの遊び、学校の様子の紹介などもあり、日本とのつながりを考えるような内容になっている。

さらに教科書の下巻の最後には、世界の中でともに平和な社会をつくっていこうという国際理解にかかわる指導内容がある。その中には「ソン（孫）選手の胸の旗（注7）」や「心と心のむすびつきを（注8）」という大阪市の子ども民族音楽会の紹介がそれぞれ違う教科書に一ページを使って載っている。いずれも「国際化」という今回の教科書改訂の特徴を反映し、在日外国人教育にとっても有用な内容を含んだものとして注目したい。

（注7）「ソン（孫）選手の胸の旗」（「社会6下」教育出版一九九六年度版 P44）

韓国には、オリンピックのマラソン競技の優勝者が二人います。一九三六年のベルリン大会のソン選手と、一九九二年のバルセロナ大会のファン（黄）選手です。しかし、競技中の二人の胸の旗を比べてみると、ファン選手の胸には韓国の国旗がついているのに、ソン選手の胸には、韓国の国旗ではなく、なぜか日の丸がついています。

ベルリン大会当時、韓国は日本の植民地とされていました。そのため、ソン選手は、日の丸をつけて走らなければならなかったのです。後に、ソウル大会（一九八八年）で、七六歳になったソンさんは、最終聖火ランナーとして走りました。その時にソンさんは、「優勝した時よりうれしかった。」と、飛びはねるように走りました。ソンさんと韓国の人々は、こうしたオリンピックのできごとに、どんな思いをもったことでしょう。

ベルリン大会のソン選手
（左側の選手）

バルセロナ大会のファン選手

「日の丸が掲揚（けいよう）され，君が代が流れました。わたしは，祖国をうばわれた民族のくやしさといかりで，なみだがとめどなく流れました。この時，二度と日本の名のもとには走るまいと決意しました。」

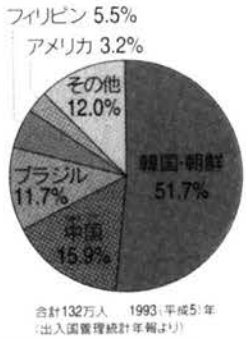
表彰台に立った時の気持ちをふり返るソンさんの話

（注8）「心と心のむすびつきを」（「社会6下」光村図書一九九六年度版 P50）

世界の国々には、それぞれの歴史や文化があります。おたがいの文化を楽しみ、そのよさを知り合うために、さまざまな活動が行われています。日本には、約一〇〇万人の外国人がくらしています。そして、その数は年々増えています。そのうち半分以上は、韓国・朝鮮の人たちです。

大阪市では、日本の小・中学校に通っている韓国・朝鮮の子どもたちが、自分の国の歌やおどりなどを発表する場として、毎年、「子ども民族音楽会」が開かれています。日本の子どもたちも出演するこの会は、年々参加者が増えています。〈子ども民族音楽会に参加して〉

大阪市の位置



日本に住んでいる外国人

子ども民族音楽会の様子

昨年は，クラスの韓国人の友達が出演するので，応援に行きました。おどりはとてもきれいだったし，演奏もじょうずで，思わず体でリズムを取っていました。
全年，日本人のわたしたちも出場できるなんて，思ってもいませんでした。放課後の練習楽しかったし，韓国・朝鮮の文化を知ることができました。

子ども民族音楽会に参加して

現行教科書の記述内容――下巻――（項目のみ）

A社	B社	C社	D社	E社
・在日韓国・朝鮮人に対する差別や偏見 ・大韓民国の子どもたち（写真） ・世界の国々をもっと知ろう（日本と朝鮮半島との関係）	・在日韓国・朝鮮人に対する差別や偏見 ・伝統的な韓国の家（写真） ソン（孫）選手の胸の旗ベルリンオリンピックのソン選手（写真）	・在日韓国・朝鮮人に対する差別や偏見 ・在日韓国・朝鮮人に対する差別を違法とした判決を報じる新聞記事（写真） ・戦争で朝鮮半島に住む人々に日本があたえた被害を調べる日本の調査団（写真） 「大韓民国の人々の生活」・韓国の子どもたち・日本からいちばん近い国・韓国の人々のくらし・日本と朝鮮半島とのかかわり ・「朝鮮人被爆者」	・在日韓国・朝鮮人をはじめ、日本にいる外国人に対しての偏見	・日本に住んでいる　韓国・朝鮮の人々や外国人労働者に対する、偏見や差別 ＊外国人の人権委 「心と心の結びつきを」大阪子ども民族音楽会に参加して（写真。作文）

表1　各教科書項目別の記述・写真等の分量

教科書	A社			B社			C社			D社			E社		
項目	本文の字数	本文以外の字数	写真等の枚数	本文の字数	本文以外の字数	写真等の枚数	本文の字数	本文以外の字数	写真等の枚数	本文の字数	本文以外の字数	写真等の枚数	本文の字数	本文以外の字数	写真等の枚数
(1)渡来人	230	140	2	180	150	0	300	130	2	190	80	1	160	30	1
(2)行基と大仏づくり	30			80			20			30			40		
(3)元寇			1			1	50		1	30		1	60		1
(4)秀吉の朝鮮侵略	160	140	2	220	10	1	180	190	3	110	30	1	160	70	2
(5)江戸時代の朝鮮通信使	270*1	140	3	150	90	1	40	150	2	80	10	3	110	140	2
(6)韓国併合強制連行	590	300	3	530	20	1	1,090	210	4	410	470	3	370	230	2
(7)関東大震災と朝鮮人虐殺*2	110			130			190			140			170		
計	1,390	720	11	1,290	270	4	1,870	680	12	990	590	10	1,070	470	8

・小見出し，句読点等も一文字と考え，四捨五入して10の位までの概教で示した。
・本文の補説や写真等の説明など活字のポイントをおとして書かえているものは「本文以外」の項に含めた。
・「(8)戦後の歴史」「(9)その他」の項はこの表から省いた。
＊1　A社版には別ページに発展学習として関連内容が載っているが，ここには含めていない。
＊2　教科書によっては補説と思えるものもあるが全部本文として考えた。

以上、九六年度版現行教科書の記述内容をしらべてみた。学習指導要領という枠に加えて、教科書検定という規制があるため、五社の教科書とも記述の内容に大きく異なる点は少ない。しかし記述の分量や取り上げ方には特徴が見られる。（表1参照）

①　記述の分量はA社とC社が他の三社に比べて多い。（教科書の大きさ―B4版・横書き―、全体の頁数、活字の大きさなどはどの教科書もほとんど変わらない。）

②　全体の記述の分量や写真等の数は、C社が他の五社の中で一番多い。特に「渡来人」「秀吉の朝鮮侵略」「韓国併合・強制連行」の項は記述の分量だけでなく、写真等の数も他のものと比べて際立っている。また、「秀吉の朝鮮侵略」や「韓国併合」の項では、単に歴史的な事実だけでなく、侵略に反対する人々の戦いに重点をおいた記述が多く見られる。これは、「日本の歴史や社会、文化の動きをアジアの中で適確に位置づけ、他国の人々のくらしや思いを歴史的にも正しく理解する」[4]というC社の編集方針によるものと思われる。C社が他社と違って大阪に基盤をおき、その教科書が関西地方で多く使われてきていることから、在日外国人教育の視点を反映したものであろう。

③　A社は、「朝鮮通信使」に特に重点をおいて取り上げていることがわかる。記述に四〇〇字余りを当て、三枚の写真・地図をいれ、別に「地域に見る国際交流をさがそう」という発展学習に一ページ（約六〇〇字、写真四枚、地図一枚）を割いている。通信使の行程が入った地図には、漢城（ハンソン）出発から帰着までの日程が書かれており、長い旅だったことがわかるようになっている。これはA社の「近隣のアジア諸国とわが国の交流や歴史についての教材を豊かに」[5]するという国際理解学習の視点からの編集方針からくるものと思われる。「近隣アジア諸国に配慮した記述」は近代においてだけでなく、ここにも現われていると思われる。

④　行基や伊藤博文は、学習指導要領で「取り上げて指導する」べき人物[6]の中に入っており、どの教科書でも扱わなければならないとされているが、今回の改訂では今まであまり取りあげられることがなかった人物が登場してきている。いずれも、日

本と朝鮮の歴史的関係の学習には重要な人物である。

・李三平　・李瞬臣　・雨森芳洲　・柳寛順（朝鮮人については、いずれも母国音読みのルビがつけられている。安重根については「独立運動家」や「韓国の青年」とだけ書かれ、名前は出されていない）

⑤　学習指導要領では、小学校での歴史学習については「人物や文化遺産」を中心にし、「歴史的事象を羅列的に取り上げることがないように配慮する」こととされ、「通史的に取り扱うこと」は中学校でとされている。[7] しかし、在日外国人教育では日本と韓国・朝鮮の関係や在日韓国・朝鮮人の歴史的経緯についての通史的な学習は重要である。学習指導要領の制約の中で、日本と朝鮮の関係の歴史をまとめて整理して、歴史学習以外の場で、韓国・朝鮮とかかわりを考えさせようという試みもいくつか見られる。[8]

次に、韓国・朝鮮に関する記述内容がこれまでの教科書ではどう変わってきたかを見ていくことにする。

二、これまでの教科書ではどう変わってきたか

敗戦直後の数年間に小学校（一九四七年三月までは国民学校）での歴史教育はＧＨＱ指令や「社会科」の新設などで大きく変わり、[9] 日本の歴史が現在のように六年生で通史的扱われるようになるのは、一九五八年の指導要領改訂以降になる。[10]

したがってここでは、一九五八年の学習指導要領に基づき、日本の歴史が六年の社会科で通史的に扱われるようになった一九六一年度版教科書から、記述の変遷を次の四項目にしぼってたどってみることにする。

(1)　渡来人
(2)　秀吉の朝鮮侵略
(3)　江戸時代の朝鮮通信使
(4)　韓国併合・強制連行

この当時は、日本標準・東京書籍・大阪書籍・中教出版・学校図書・教育出版の六社から小学校社会科の文部省検定済教科書が出されているが、ここでは、現在関西地方で多く使われている大阪書籍版の記述を資料として見ていくことにする。[11]

(1)　渡　来　人

四世紀頃の中国や朝鮮からの渡来した人が進んだ技術や道具を伝えたことについては、六一年度版から一貫して記述されている。その内容は少しずつ詳しくなってきている。教科書に「渡来人」という用語が初めて登場するのは八〇年度版からである。[12]

また、渡来した人々の出身地をさすのに「朝鮮半島」という名称が八〇年度版になるまでずっと使われている。この呼び方は戦後当初の文部省著作教科書「く

にのあゆみ（上・下）」にも登場している。[13] これは、朝鮮を一つの国として、朝鮮人を対等の民族として考えなかった戦前からの考えがまだ残っていることの反映であろう。さらに、渡来した人々で「はたらきのある人には、重い役目や高い身分があたえらました。」（六二年度版）という表現は「くにのあゆみ(上)」にも出ており六八年度版まで続いている。[14]

しかし、七四年度版からは（渡来人が）「日本の産業や文化を進めるのに大きなはたらきをしました」という表現になり、「渡来人によって、日本の技術や文化がめだって高ま」（九二年度版）ったことに重点をおくという方向に変わってきている。また、本文中の小見出し（太字で表記）も「国の統一（六八年度版）」、「大和朝廷のなりたち（七一年度版）」から「朝鮮から来た人々（八〇年度版）」、「大和朝廷と渡来人（八六年度版）」、「渡来人（九二年度版）」、「渡来人のかつやく（九六年度版）」と渡来人が果たした役割に重点をおくようになってきた。さらに、九六年度版では「渡来人が伝えたはた織り」や「土器づくり」の挿絵を入れ、渡来人の活躍がイメージしやすいように工夫されてきている。

記述内容の変遷――渡来人――（「小学社会6年（上・下）」一九六二年度版―一九九六年度版　大阪書籍）

一九六二年度版（昭和三七年）

［新しい技術］　四世紀ごろから、中国や朝鮮半島と交通がいっそうさかんになりました。ようさん・はたおり・さいほうの技術のほか、家を建てたり、船をつくったり、かわら・紙・筆・酒などをつくる新しい技術や道具が、中国や朝鮮半島の人たちによって伝えられました。その人たちのなかには、日本にうつり住む人たちもだんだんふえ、はたらきのある人には、重い役めや高い身分があたえられました。

一九六五年度版（昭和四〇年度）

――一九六二年度版と同じ――

一九六八年版（昭和四三年度）

［国の統一］　大和朝廷は、四世紀にわが国の大部分をしたがえるようになり、その勢いは、海をこえて朝鮮半島にまでのびました。（以下略）

［大陸文化が伝わる］　四世紀の終わりごろから、中国や朝鮮半島と交通がさかんになりました。養蚕・はたおりなど技術のほか、家を建てたり、船をつくったり、土器や鉄器・紙・筆・酒などをつくる進んだ技術や道具が、中国や朝鮮半島の人々によって伝えられました。日本に移り住む者もだんだんふえ、はたらきのある人には重い役めや身分があたえられました。

一九七一年度版（昭和四六年度）

［大和朝廷のなりたち］　大和朝廷は、四世紀に日本の大部分をしたがえ、そのいきおいは、海をこえて朝鮮半島の南部にまでおよびました。朝鮮半島や中国とのゆききがさかんになると、朝鮮や中国から、大ぜいの人々が、日本に移り住むようになりました。それらの人々は、養蚕・はた織りの方法、家や船のすすんだつくり方、土器や、農具・武具などの鉄器、そのほか、紙・筆・酒などをつくる新しい方法や道具をつたえました。ていぼうをきずいたり、用

水路をほったりして田を開く方法も伝えました。漢字をはじめ、儒教や仏教という新しい教えも大陸の人々がつたえてきました。大和朝廷は、これらの大陸のすすんだ文化を、早くからとり入れたので、朝廷のいきおいは、ますますつよくなりました。

一九七四年度版（昭和四九年度）

［大和朝廷のなりたち］　大和朝廷は、四世紀に日本の大部分をしたがえ、そのいきおいは、海をこえて朝鮮半島の南部にまでおよびました。朝鮮半島や中国とのいききがさかんになると、朝鮮や中国から、大ぜいの人々が、日本に移り住むようになり、日本の産業や文化をすすめるのに大きなはたらきをしました。それらの人々は、養蚕・はた織りの方法、家や船のすすんだつくり方、土器や、農具・武具などの鉄器、そのほか、紙・筆・酒などをつくる新しい方法や道具をつたえました。

一九七七年度版（昭和五二年度）

［大和朝廷のなりたち］　大和朝廷は、四世紀に日本の大部分をしたがえ、さかんに朝鮮半島や中国といききするようになりました。五世紀ごろには、朝鮮半島から日本に移り住む人が多くなり、日本の産業や文化をすすめるのに大きなはたらきをしました。それらの人々は、養蚕・はた織りの新しい方法、家や船のすすんだつくり方、土器や、農具・武具などの鉄器、そのほか紙・筆・酒などをつくる新しい方法や道具を伝えました。ていぼうをきずいたり、池や用水路をほったりして田を開く方法も伝えました。漢字をはじめ、儒教や仏教という新しい教えも大陸の人々が伝えてきました。

一九八〇年度版（昭和五五年度）

［朝鮮から来た人々］　（大和朝廷は、四世紀に日本の大部分をしたがえ、さかんに朝鮮や中国といききするようになりました。）五世紀ごろには、朝鮮から日本に移り住む人（渡来人）が多くなり、日本の産業や文化を進める大きな力となりました。これらの人々は、養蚕・はた織り・かじなどでのすぐれた技術、家や船の進んだつくり方、紙・筆・酒などをつくる新しい方法を伝えました。堤防をきずいたり、池や用水路をほったりして、水のないところに田を開く方法も伝えました。また、漢字をはじめ、儒教や仏教という新しい教えも伝えました。

一九八三年度版（昭和五八年度）

――一九八〇年版と同じ――

一九八六年度版（昭和六一年度）

［大和朝廷と渡来人］　大和朝廷は、朝鮮や中国とのいききもさかんにし、五世紀ごろには、朝鮮から日本に移り住む渡来人も多くなりました。これらの人々は、養蚕・はた織り・かじなどでのすぐれた技術、家や船の進んだつくり方、紙・筆・酒などをつくる新しい方法を伝えました。堤防をきずいたり、池や用水路をほったりして、水のないところに田を開く方法も伝えました。また、漢字をはじめ、儒教や仏教も伝えました。

一九八九年度版（平成一年度）

――一九八六年度版と同じ――

一九九二年度版（平成四年度）

［渡来人］　このころから、朝鮮や中国とのいききがさかんになり、五世紀ごろからは、朝鮮や中国から日本に移り住む、渡来人も多くなりました。これらの人々は、養蚕・はた織り・かじなどでのすぐれた技術、家や舟の進んだつくり方、紙・筆・酒などをつくる方法を伝えました。また、漢字や、儒教・仏教という新しい教えも伝えました。こうして、日本の技術や文化が、渡来人によってめだって高まりました。大和朝廷をささえる有力な豪族たちのなかには、蘇我氏のように、渡来人とのむすびつきが強く、中国や朝鮮の文化をとり入れて、大きな力をもつ者も出てきました。

一九九六年度版（平成八年度）

［渡来人のかつやく］　各地で古墳がつくられはじめたころから、朝鮮や中国とのいききがさかんになり、大陸から日本に移り住む渡来人が多くなりました。これらの人々は、はた織り・土器・かじ、土木・建築などでの進んだ技術や、紙・筆などのつくり方を伝えました。漢字や、儒教・仏教という新しい教えも伝えました。こうして、渡来人によって、日本の技術や文化がめだって高まりました。朝廷も、これらの渡来人をかんげいし、書記役などとしてむかえたので、朝廷の役人としてかつやくする者も多くいました。また、豪族のなかには、蘇我氏のように渡来人との結びつきを強めて、朝鮮や中国の文化をとり入れ、大きな力をもつ一族も出てきました。

＊渡来人が伝えたはた織り（想像図）

＊渡来人が伝えた土器づくり（想像図）

(2)

秀吉の朝鮮侵略

まず、秀吉の朝鮮侵略の理由についての変遷をみる。（〰〰線は引用者）

一九六二年度版	明とも貿易をしようしたが、ことわられたので、明に出兵しようとしました。そこで朝鮮に道案内をもとめたが、これもことわられ、ついに
一九六八年度版	明をしたがえようとして、朝鮮に軍隊の通行をみとめさせようとしましたが、これもことわられました。そこで
一九七一年度版	大陸にもいきおいをのばそうとくわだて、大軍を朝鮮にすすめ、
一九八〇年度版	中国の明をしたがえようとして、諸大名に命じ、二度も朝鮮に大軍を
一九九二年度版	中国（明）をしたがえようと考え、朝鮮に中国侵略の道案内を命じました。朝鮮がそれに応じないので、
一九九六年度版	中国（明）をしたがえようと考え、朝鮮に二回にわたって

また、秀吉軍が「兵をひきあげた」ことについては、その記述が次のように少しずつ変わってきているのが分かる。

一九六二年度版	そのちゅうとで秀吉が病気でたおれたので、兵を引きあげました。
一九六八年度版	秀吉は病気でたおれ、兵を引きあげました。
一九八〇年度版	秀吉の死後、諸大名は兵をひきあげました。
一九九二年度版	秀吉が死ぬと、戦いにつかれた大名たちは兵を引き上げました。
一九九六年度版	戦いにつかれた大名たちは、秀吉が死ぬと兵を引き上げました。

秀吉の朝鮮侵略は、朝鮮側の「はげしい抵抗にあって」失敗に終わった。このことが明記されたのは八〇年度版になってからである。それまでは失敗に終わったことがわかる記述はなく、秀吉の病気のために兵を引き上げ、その結果戦いが終わったという記述がなされている。最近では、「朝鮮の人々に大きな苦しみをあたえ（九二年度版）」たことや「朝鮮の人々に多くのぎせい者をだし、朝鮮の国土をあらし（九六年度版）」たことも付け加えて記述され、韓国・朝鮮の人々の思いにも目を向けるように変わってきている。さらに、九六年度版には、朝鮮の水軍の亀甲船の写真や「強制的に連れてこられた朝鮮人陶工」や有田焼の「李三平の碑[15]」の写真があり、この侵略で連れてきた焼き物の技術者によって全国各地で新しい陶磁器の生産が始まり、それが今に伝えられていることにもふれている。また、九二年度版からは「秀吉の朝鮮侵略」という言葉を使い、これが「侵略」戦争であることを明記している[16]。

記述内容の変遷――秀吉の朝鮮侵略――

一九六二年度版（昭和三七年）

［秀吉の全国統一］　秀吉は明とも貿易をしようしたが、ことわられたので、明に出兵しようとしました。そこで朝鮮に道案内をもとめたが、これもことわられ、ついに二度も朝鮮に兵を送りました。しかし、そのちゅうとで秀吉が病気でたおれたので、兵を引きあげました。

一九六五年度版（昭和四〇年度）

――一九六二年度版と同じ――

一九六八年度版（昭和四三年度）

［秀吉の全国統一］　明とも有利に貿易をしようとくわだてましたが、ことわられました。秀吉は明をしたがえようとして、朝鮮に軍隊の通行をみとめさせようとしましたが、これもことわられました。そこで二度も大軍を出して朝鮮をせめました。しかし、秀吉は病気でたおれ、兵を引きあげました。

一九七一年度版（昭和四六年度）

［秀吉の全国統一］　大陸にもいきおいをのばそうとくわだて、大軍を朝鮮にすすめ、朝鮮や明の兵と戦いました。しかし、秀吉は病気でたおれ、兵をひきあげました。

一九七四年度版（昭和四九年度）
――一九七一年度版と同じ――
一九七七年度版（昭和五二年度）
――一九七一年度版と同じ――
一九八〇年度版（昭和五五年度）
［秀吉の全国統一］　また、中国の明をしたがえようとして、諸大名に命じ、二度も朝鮮に大軍を送りました。しかし、朝鮮軍と明のえん軍および朝鮮の民衆のはげしい抵抗にあって失敗に終わり、秀吉の死後、諸大名は兵をひきあげました。
一九八三年度版（昭和五八年度）
――一九八〇年度版と同じ――
一九八六年度版（昭和六一年度）
［秀吉の全国統一］　また、明をしたがえようと考え、全国の大名に命令して、二度も朝鮮に大軍でせめこみました。しかし、朝鮮軍と明の援軍および朝鮮の民衆のはげしい抵抗にあって苦戦しました。秀吉の死後、諸大名は兵をひきあげました。（海をわたって朝鮮にせめこむとは、大名も武士もおどろいただろうな。）
一九八九年度版（平成一年度）
――一九八六年度版と同じ――
一九九二年度版（平成四年度）
［朝鮮侵略］　国内を統一した秀吉は、次に中国（明）をしたがえようと考え、朝鮮に中国侵略の道案内を命じました。朝鮮がそれに応じないので、全国の大名に命令して、二度も朝鮮に大軍でせめこみました。しかし、朝鮮軍と明の援軍や、朝鮮民衆のはげしい抵抗にあって苦戦しました。秀吉が死ぬと、戦いにつかれた大名たちは兵を引き上げました。秀吉の朝鮮侵略は、朝鮮の人々に大きな苦しみをあたえました。また、豊臣氏の力がおとろえるきっかけにもなりました。
＊朝鮮の城をせめる日本軍（写真）
一九九六年度版（平成八年度）
［朝鮮侵略］　国内を統一した秀吉は、次に中国（明）をしたがえようと考え、朝鮮に二回にわたって朝鮮に大軍を送りこみました。しかし、朝鮮軍と中国の援軍や、朝鮮民衆のはげしい抵抗にあいました。戦いにつかれた大名たちは、秀吉が死ぬと兵を引き上げました。秀吉の朝鮮侵略は、朝鮮の人々に多くのぎせい者を出し、朝鮮の国土をあらしました。また、豊臣氏の力がおとろえるきっかけにもなりました。

（連れてこられた朝鮮人陶工）朝鮮を侵略した諸大名は、朝鮮から多くの陶工を日本に強制的に連れてきて、自分の領内で陶磁器をつくらせました。

＊朝鮮の城をせめる日本軍（写真）

＊朝鮮の軍船（写真）

＊李三平の碑（写真）

(3) 江戸時代の朝鮮通信使

江戸時代に「朝鮮との国交」が開かれたことが記述されるようになったのは七七年度版からである。それまでは「朝鮮との国交」についての記述は見当たらない。[17]

七七年度版の「鎖国」の項は次のように書かれている。「幕府はこの乱を（島原の乱）しずめたのち、外国とのいきをかたく禁じました。これを鎖国といいます。けれども、キリスト教をひろめないオランダと、中国で明にかわって国をたてた清との商人だけは、長崎に来て貿易することがみとめられました。朝鮮との国交も開かれました。鎖国は、幕府だけが貿易をおこない、政治をかためるのに役だちました。（後略）[18]」

この年から江戸幕府のもとでの「朝鮮との国交」が開かれたことが記述されたのは、映画「江戸時代の朝鮮通信使」が制作されるなど、朝鮮通信使について知られるようになったことと関連しているものと思われる。[19]

七七年度版からの「朝鮮との国交」についての記述の変遷をみる。

一九七七年度版	朝鮮との国交も開かれました。
一九八〇年度版	秀吉のときからとだえていた朝鮮との国交も開かれました。
一九八六年度版	秀吉の朝鮮侵攻のときからとだえていた、朝鮮との国交も開きました。
一九九二年度版	秀吉の朝鮮侵略でとだえていた朝鮮との国交を回復しました。
一九九六年度版	秀吉の朝鮮侵略以来とだえていた朝鮮との国交を回復しました。

朝鮮通信使については八六年度版から写真（絵図）で紹介し、九二年度版からは解説文で「道中各地での文化交流」についてふれ、その例として岡山県牛窓の「唐古踊り」を紹介している。

一九八六年度版	「江戸をおとずれた朝鮮通信使の図」
一九九二年度版	「江戸をおとずれた朝鮮通信使の図」・「唐古踊り」（折り込みのページに）

一九九六年度版　「江戸をおとずれた朝鮮通信使の図」・「唐古踊り」

記述内容の変遷――江戸時代の朝鮮通信使――

一九六二年度版（昭和三七年）から一九七四年度版（昭和四九年度）までは記述はない。

一九七七年度版（昭和五二年度）

［鎖国］　朝鮮との国交も開かれました。

一九八〇年度版（昭和五五年度）

［鎖国］　また、秀吉のときからとだえていた朝鮮との国交も開かれました。

一九八三年度版（昭和五八年度）

――一九八〇年度版と同じ――

一九八六年度版（昭和六一年度）

［鎖国］　また、秀吉の朝鮮侵攻のときからとだえていた、朝鮮との国交も開きました。

＊朝鮮からの使い（写真）

（写真解説）将軍が代わるたびに、お祝いの使いが江戸までやってきました。

一九八九年度版（平成一年度）

――一九八六年度版と同じ――

一九九二年度版（平成四年度）

［鎖国］　また、幕府は、秀吉の朝鮮侵略でとだえていた朝鮮との国交を回復しました。

＊江戸をおとずれた朝鮮からの使節（写真）と唐子おどり（写真）

（写真解説）朝鮮からの使節は、江戸時代を通じて十二回来日し、江戸だけなく道中各地でも、日本人が一行とふれあい、鎖国のもとでの文化交流がおこなわれました。その一つに岡山県牛窓町には朝鮮風の衣装をまとった唐子おどりという行事が今に伝えられています。

一九九六年度版（平成八年度）

［鎖国］　また、幕府は、秀吉の朝鮮侵略以来とだえていた朝鮮との国交を回復しました。

＊江戸をおとずれた朝鮮からの使節（写真）と唐子おどり（写真）

（写真解説）朝鮮からの使節は、江戸時代を通じて十二回来日し、江戸だけなく道中各地でも、日本人が一行とふれあい、鎖国のもとでの文化交流がおこなわれました。その一つに岡山県牛窓町には朝鮮風の衣装をまとった唐子おどりという行事が今に伝えられています。

(4) 韓国併合と強制連行

韓国併合や強制連行についての記述の変化を次の四つの観点にわけてみる。

① 一九一〇年の韓国併合について

六二年度版では、当時の韓国が「そのころ政治がみだれて、国が弱まっていた」ので、「わが国に併合され」たという印象を持つような書き方をしている。六八年度版からはこの記述はなくなったが、今度は「韓国併合」で日本が「大陸に発展する足場をかためました。」という記述が登場し八六年度版までの二〇年以上も続いている。（八〇年度版からは「発展」が「進出」に変わる。）また、併合が「警察や軍隊を韓国のすみずみにまで配置し」て強制的におこなわれたことがはっきり記述されたのは八九年度版からである。八九年度版の「日露戦争後、日本は、韓国を政治のうえで指導する権利をもち、」という表現は、次の改訂（九二年度版）では、「日本は、韓国の政治や外交の権利をうばい、」と大きく変わっている。

② 反対運動・独立運動ついて

八〇年度版に初めて「韓国の人々のなかには、はげしく反対する動きもありましたが、」と書かれ、八九年度版まで同じ記述が続く。九二年度版から「日本の支配に反対して民衆が各地で立ち上がり、はげしい抵抗運動を起こしました。」となり、九六年度版からはこれに加えて、「三・一独立運動」が詳しく紹介され、運動が「朝鮮全土に」ひろがったことが強調されている。さらに、柳寛順（ユクワンスン）や伊藤博文の射殺についてもふれられており、前年度までのものと大きく変わっている。この傾向は他の四社の九六年度版にもほぼ共通して見られる。

発行年度	一九一〇年の韓国併合の記述	反対運動・独立運動ついての記述
一九六二年度版 一九六五年度版	そのころ政治がみだれて、国が弱まっていた韓国（そのころの朝鮮）が、わが国に併合されました。	（記述なし）
一九六八年度版 ～一九七七年度版	韓国を併合し、大陸に発展する足場をかためました。	（記述なし）
一九八〇年度版 ～一九八六年度版	日本は、いっそう韓国に勢いをのばし、大陸進出の足場をかためました。※ 日本は、一九一〇年、韓国を併合して日本の領土としました。	※これに対し、韓国の人々のなかには、はげしく反対する動きもありましたが、
一九八九年度版	日露戦争後、日本は、韓国を政治のうえで指導する権利をもち、いっそう勢力をのばしました。※日本は、警察や軍隊を韓国のすみずみに	※韓国でははげしく反対する動きもありましたが、

	まで配置し、一九一〇年、ついに韓国を併合して日本の植民地としました。		
一九二二年度版	日露戦争後、日本は、韓国の政治や外交の権利をうばい、韓国内に勢力をのばしました。※日本は、一九一〇年（明治四三年）、ついに韓国を併合し、植民地とし日本の領土にしました。そして、警察や軍隊を朝鮮のすみずみにまで配置して、抵抗運動をおさえようとしました。	※韓国では、日本の支配に反対して民衆が各地で立ち上がり、はげしい抵抗運動をおこしました。 ＊日本の支配に抵抗する朝鮮の人々（写真）	
一九九六年度版	日露戦争後、日本は韓国に勢力をのばし、韓国の外交や政治の権利をうばって支配を強めました。※(1) 日本は、一九一〇年（明治四三年）、ついに韓国を併合し、植民地とし日本の領土にしました。そして、警察や軍隊を朝鮮（韓国）のすみずみにまで配置して、抵抗運動をおさえようとしました。※(2)	※(1) これに対して韓国では、日本の支配に反対する民衆が各地で立ち上がり、はげしい抵抗運動をおこしました。 ※(2) そして、一九一九年（大正八年）三月一日、朝鮮の独立をめざす人々が立ち上がりました。（三・一独立運動）。この運動は、朝鮮全土にひろがり、その後の朝鮮独立運動の出発点になりました。 〈抵抗運動と伊藤博文〉抵抗運動がはげしくなると、日本の朝鮮支配の実現に重要な役割を果たした伊藤博文が、一九〇九年に朝鮮の青年に射殺される事件もおこりました。 〈三・一独立運動〉〈柳寛順（ユウアンジュン）についての記述・約三六〇字・資料参照〉 こうした日本の占領に対し、すべての地域で抵抗運動がはげしくなりました。	

③ 植民地政策について

併合後、韓国でおこなった日本の植民地政策についての記述も、八〇年度版に初めてでてくる。朝鮮の人々は土地調査事業によって渡日を余儀なくされたことが年々詳しい記述で書かれるようになってきている。朝鮮の農民の田畑が日本人に「買い上げられ（八〇年度版）」が「買い取られ（八九年度版）」に変わり、九二年度版からは、「安いねだんで」買い取られたことを付け加えている。また、渡日を余儀なくされた人が、「日本人よりも安い賃金で」「危険な仕事」をさせられたことは九二年度版から書かれている。「土地をうしなった」人々が日本だけでなく「満州」へも渡ったことや「日本語で授業を受ける朝鮮の子どもたち（写真）」についても八九年度版から取り上げられている。さらに九二年度版からは、名前を「日本名に改めさせたり」した創氏改名についての記述も見られる。そして九六年度版には、皇民化教育により「日本語で日本の歴史が教えられるなど、朝鮮の人々は、民族としてのほこりを深くきずつけられました。」や日本が「たえがたいことを強制しました。」など記述があり、子どもが「侵略を受けたアジアの人々の立場に立って、その苦しみを考える」[20]というここでの指導の意図が感じられる。

④　強制連行などについて

「朝鮮の人々も、たくさん日本の内地の炭鉱や鉱山につれてこられて、はげしい労働をさせられました。」という記述は七七年度版から出てくるが、「強制的に」や「中国人も」という言葉や「七〇万人」という数字が入るのは八六年度版からである。また、九六年度版には「強制連行されて働かされる朝鮮の人々」の写真資料が掲載され、具体的に考えられるようにしている。一方「従軍慰安婦」についての記述はないが、「生活（くらし）と政治」の単元の「くらしと憲法――平和主義」の項に、「戦争で朝鮮半島に住む人々に日本が与えた被害を調べる日本の調査団」の写真資料[21]は「従軍慰安婦」問題を取り上げているものと推測される。

発行年度	植民地政策についての記述	強制連行などについての記述
一九六二年度版～一九七四年度版	（記述なし）	（記述なし）
一九七七年度版	（記述なし）	朝鮮の人々も、たくさん日本の内地の炭鉱や鉱山につれてこられて、はげしい労働をさせられました。
一九八〇年度版 一九八三年度版	朝鮮の農民の田畑はつぎつぎ日本人に買いあげられ、土地を失ってくらしにこまった人々は、日本本土にわたって、炭鉱などで、きびしい仕事をしなければなりませんでした。	（一九七七年度版に同じ）。
一九八六年度版	（一九八〇年度版　一九八三年度版に同じ）	およそ七〇万人の朝鮮の人々のほか、中国人も強制的に日本に連れてこられ、各地の炭鉱や鉱山ではげしい労働をさせられました。
一九八九年度版	併合後の朝鮮では、農民の田畑がつぎつぎと日本人に買い取られ、土地を失ってくらしにこまる人々が出てきました。これらの人々は、農地を求めて満州へ行ったり、日本本土にわたって、土木工事や炭鉱などできびしい仕事についたりしなければなりませんでした。 ＊日本語で授業を受ける朝鮮の子どもたち（写真）	（一九八六年度版に同じ）
一九九二年度版	併合後の朝鮮では、農民の田畑が安いねだんでつぎつぎと日本人に買い取られ、くらしにこまる人々が多くなりました。これらの人々は、仕事を求めて満州へ移ったり、日本へわたって、日本人よりも安い賃金で、土木工事や炭鉱などの危険な仕事についたりしなければなりませんでした。 ＊日本語で授業を受ける朝鮮の子どもたち（写真）学校では、強制的	また、約七〇万人の朝鮮の人々や、約四万人の中国の人々が強制的に日本に連れてこられて、各地の炭鉱などできびしい労働をさせられました。

	に日本語や日本の歴史を教えました。朝鮮では、人々の姓名を日本名に改めさせたり、徴兵令をしいたりしました。	
一九九六年度版	併合後の朝鮮では、農民の田畑が安いねだんでつぎつぎと日本人に買い取られ、くらしにこまる人が多くなりました。土地を失った人々は、仕事を求めて満州や日本に移り、安い賃金で土木工事や炭鉱などの危険な仕事につきました。 〈安い賃金〉 同じ仕事をしても、日本人の半分ほどの賃金しかはらわれませんでした。 また、朝鮮の学校では日本語で日本の歴史が教えられるなど、朝鮮の人々は、民族としてのほこりを深くきずつけられました。 ＊日本語で授業を受ける朝鮮の子どもたち（写真） 朝鮮では、朝鮮の人々の姓名を日本名に改めさせたり、徴兵制をしいたりするなど、たえがたいことを強制しました。	戦争が長びくと、日本の国内では、働き手が少なくなりました。そこで約七〇万人の朝鮮の人々や、約四万人の中国の人々を日本に強制連行してきて、各地の炭鉱や工場などで、ひどい条件のもとに働かせました。＊強制連行されて働かされる朝鮮の人々（写真）警察官がかんとくしています。

記述内容の変遷——韓国併合と強制連行——

一九六二年度版（昭和三七年）から

［日露戦争］　この条約で、わが国は、南樺太とロシアが南満州でもっていたいろいろな権利をロシアからゆずりうけ、朝鮮を保護する権利を得ました。

一九一〇年（明治四三年）には、そのころ政治がみだれて、国が弱まっていた韓国（そのころの朝鮮）が、わが国に併合されました。

一九六五年度版（昭和四〇年度）

［日露戦争］　この条約で、わが国は、南樺太とロシアが南満州でもっていたいろいろな権利をロシアからゆずりうけ、朝鮮を保護する権利を得ました。

明治の終わりには、そのころ政治がみだれて、国が弱まっていた韓国（そのころの朝鮮）が、わが国に併合されました。

一九六八年度版（昭和四三年度）

［日露戦争］　わが国は、ロシアから南樺太と南満州鉄道のなどの権利をゆずりうけました。その後、わが国は、韓国を併合し、大陸に発展する足場をかためました。

一九七一年度版（昭和四六年度）

［日露戦争］　日本は、ロシアから南樺太と南満州鉄道の権利などとをゆずりうけ、そののち、韓国を併合し、大陸に発展する足場をかためました。

一九七四年度版（昭和四九年度）

――一九七一年度版と同じ――

一九七七年度版（昭和五二年度）

［日露戦争］　日本は、ロシアから南樺太と南満州鉄道の権利などとをゆずりうけ、そののち、韓国を併合し、大陸に発展する足場をかためました。

［苦しい国民生活］　朝鮮の人々も、たくさん日本の内地の炭鉱や鉱山につれてこられて、はげしい労働をさせられました。

一九八〇年度版（昭和五五年度）

［日露戦争］　また日本は、いっそう韓国に勢いをのばし、大陸進出の足場をかためました。これに対し、韓国の人々のなかには、はげしく反対する動きもありましたが、日本は、一九一〇年、韓国を併合して日本の領土としました。朝鮮の農民の田畑はつぎつぎ日本人に買いあげられ、土地を失ってくらしにこまった人々は、日本本土にわたって、炭鉱などで、きびしい仕事をしなければなりませんでした。

［苦しい国民生活］　朝鮮の人々も、日本の内地の炭鉱や鉱山に連れてこられて、はげしい労働をさせられました。

一九八三年度版（昭和五八年度）

――一九八〇年度版に同じ――

一九八六年度版（昭和六一年度）

［日露戦争］　また日本は、いっそう韓国に勢いをのばし、大陸進出の足場をかためました。これに対し、韓国の人々のなかには、はげしく反対する動きもありましたが、日本は、一九一〇年、韓国を併合して日本の領土としました。朝鮮の農民の田畑はつぎつぎ日本人に買いあげられ、土地を失ってくらしにこまった人々は、日本本土にわたって、炭鉱などで、きびしい仕事をしなければなりませんでした。

［空しゅうの中のくらし］　およそ七〇万人の朝鮮の人々のほか、中国人も強制的に日本に連れてこられ、各地の炭鉱や鉱山ではげしい労働をさせられました。

一九八九年度版（平成一年度）

［韓国併合］　日露戦争後、日本は、韓国を政治のうえで指導する権利をもち、いっそう勢力をのばしました。韓国ではげしく反対する動きもありましたが、日本は、警察や軍隊を韓国のすみずみにまで配置し、一九一〇年、ついに韓国を併合して日本の植民地としました。併合後の朝鮮では、農民の田畑がつぎつぎと日本人に買い取られ、土地を失ってくらしにこまる人々が出てきました。これらの人々は、農地を求めて満州へ行ったり、日本本土にわたって、土木工事や炭鉱などできびしい仕事についたりしなければなりませんでした。

＊日本語で授業を受ける朝鮮の子どもたち（写真）

［空しゅうの中のくらし］　およそ七〇万人の朝鮮の人々のほか、中国人も強制的に日本に連れてこられ、各地の炭鉱や鉱山ではげしい労働をさせられました。

一九九二年度版（平成四年度）

［韓国併合］　日露戦争後、日本は、韓国の政治や外交の権利をうばい、韓国内に勢力をのばしました。韓国では、日本の支配に反対して民衆が各地で立ち上がり、はげしい抵抗運動をおこしました。日本は、一九一〇年（明治四三年）、ついに韓国を併合し、植民地とし日本の領土にしました。そして、警察や軍隊を朝鮮のすみずみにまで配置して、抵抗運動をおさえようとしました。併合後の朝鮮では、農民の田畑が安いねだんでつぎつぎと日本人に買い取られ、くらしにこまる人々が多くなりました。これらの人々は、仕事を求めて満州へ移ったり、日本へわたって、日本人よりも安い賃金で、土木工事や炭鉱などの危険な仕事についたりしなければなりませんでした。

＊日本の支配に抵抗する朝鮮の人々（写真）

＊日本語で授業を受ける朝鮮の子どもたち（写真）学校では、強制的に日本語や日本の歴史を教えました。

［一五年にもわたった戦争］　満州事変のあと一五年近くも、日本は戦争をつづけ、たくさんの人々の生命をうばいました。国民は苦しい生活をしいられ、中国や朝鮮をはじめとする多くの国々に、大きな被害をあたえました。

［戦争中の国民生活］　また、約七〇万人の朝鮮の人々や、約四万人の中国の人々が強制的に日本に連れてこられて、各地の炭鉱などできびしい労働をさせられました。朝鮮では、人々の姓名を日本名に改めさせたり、徴兵令をしいたりしました。

一九九六年度版（平成八年度）

［韓国併合］　日露戦争後、日本は韓国に勢力をのばし、韓国の外交や政治の権利をうばって支配を強めました。これに対して韓国では、日本の支配に反対する民衆が各地で立ち上がり、はげしい抵抗運動をおこしました。日本は、一九一〇年（明治四三年）、ついに韓国を併合し、植民地とし日本の領土にしました。そして、警察や軍隊を朝鮮（韓国）のすみずみにまで配置して、抵抗運動をおさえようとしました。併合後の朝鮮では、農民の田畑が安いねだんでつぎつぎと日本人に買い取られ、くらしにこまる人が多くなりました。土地を失った人々は、仕事を求めて満州や日本に移り、安い賃金で土木工事や炭鉱などの危険な仕事につきました。また、朝鮮の学校では日本語で日本の歴史が教えられるなど、朝鮮の人々は、民族としてのほこりを深くきずつけられました。そして、一九一九年（大正八年）三月一日、朝鮮の独立をめざす人々が立ち上がりました。（三・一独立運動）。この運動は、朝鮮全土にひろがり、その後の朝鮮独立運動の出発点になりました。　〈抵抗運動と伊藤博文〉　抵抗運動がはげしくなると、日本の朝鮮支配の実現に重要な役割を果たした伊藤博文が、一九〇九年に朝鮮の青年に射殺される事件もおこりました。

〈安い賃金〉　同じ仕事をしても、日本人の半分ほどの賃金しかはらわれませんでした。

〈三・一独立運動〉　一九一九年三月一日、朝鮮の独立をめざす人々が、ソウルで独立宣言文を発表しました。そして、そのとき集まった数千人の民衆は、「独立ばんざい」さけんで行進を行いました。当時一五歳の女学生柳寛順は、独立運動に参加し、独立宣言文を持ってふるさとに帰りました。そして、町や村をまわってソウルでの独立運動のようすを話し、人々に独立運動に立ち上がるよう、うったえました。柳寛順のような人々の活動によって、二〇〇万

人もの人々が参加する運動に発展しました。これに対して日本は、警察や軍隊を動員してこの運動をおさえようとしました。そのため八〇〇〇人にのぼる朝鮮の人々が死にました。日本軍にとらえられた柳寛順は、「日本人に、わたしたちをさばく権利はない。罪人としてさばかれなければならないのは、日本人だ。」と、裁判の席で述べました。

＊ソウルの公園にかざられている三・一独立運動の碑（写真）

＊日本語で授業を受ける朝鮮の子どもたち。（写真）

＊日本の支配に抵抗する朝鮮の人々（写真）日本に軍隊を解散させられた韓国の兵士は、農民とともに武器を持って立ち上がり、各地で日本の支配に抵抗しました。

［太平洋戦争とアジアの人々］　中国から東南アジアへ、そして太平洋へと占領した地域で、日本は食料や資源をりゃくだつしました。それだけではなく、その地域の人々を戦争のために働かせ、日本の文化をおしつけました。朝鮮では、朝鮮の人々の姓名を日本名に改めさせたり、徴兵制をしいたりするなど、たえがたいことを強制しました。戦争が長びくと、日本の国内では、働き手が少なくなりました。そこで約七〇万人の朝鮮の人々や、約四万人の中国の人々を日本に強制連行してきて、各地の炭鉱や工場などで、ひどい条件のもとに働かせました。こうした日本の占領に対し、すべての地域で抵抗運動がはげしくなりました。

＊強制連行されて働かされる朝鮮の人々（写真）警察官がかんとくしています。

三　おわりに

小学校歴史教科書における韓国・朝鮮に関する記述内容を、（一）五社の現行教科書の比較検討、（二）一九六二年度版から九六年度版までの記述内容の変遷という二つの側面から見た。

①　この間学習指導要領は四回改訂され、教科書も四回の全面改訂を経ており、表2からも分かるように、その記述内容は大幅に増えてきている。

②　教科書の記述内容の変遷を大きく三つの時期に分けてみる。

(1)　六〇年・七〇年代（六二年度版～七七年度版）

四つの項目を合わせても三〇〇字程度と記述の分量も少ない。「江戸時代の朝鮮との国交」や「強制連行」については全く書かれていない。[23] また、「韓国併合」については、「併合されました」「併合し、大陸に発展する足場をかためました」と簡単に書かれているだけである。また「朝鮮に道案内をもとめたが、これもことわられ」たので、朝鮮に兵を送ったという記述や「政治がみだれて、国が弱まっていた韓国」を併合したという記述からは「強い日本」「遅れて弱い朝鮮」という朝鮮像が見えてくる。

(2)　八〇年代（八〇年度版～八九年度版）

全面改訂された八〇年度版から新しい記述がいくつか見られる。「渡来人」という言葉が初めて使われ、日本の侵略に対しての「朝鮮民衆のはげしい抵抗」や「植民地支配の実態」についてわずかではあるが記述された。「江戸時代の朝鮮との国交」や「強制連行」の記述も登場する。「韓国併合と強制連行」の項目は、記述の分量が七〇年代に比べて約三倍になっている。

(3) 九〇年代（九二年度・九六年度版）

この年より教科書がこれまでのA5版縦書きからB5版横書きになり、写真などを多く使用するようになった。「江戸時代の朝鮮通信使」や「韓国併合」の記述の分量も大幅にふえた。内容も、朝鮮の人々の戦い苦しみに重点をおいた記述になってきた。

③ 現行教科書は韓国・朝鮮に関する記述も詳しくなり、在日外国人教育を意識した取り上げ方もされてきているが、残された問題点を上げておく。

・韓国併合について詳しく書かれるようになったが、いつ終わり、どうなったかという記述がほとんどない。

・韓国併合後に日本に住んだり、強制連行で連れてこられた朝鮮の人々が敗戦後どうなったかについてふれられていない。

在日韓国・朝鮮人の親たちの多くは、日本の学校で日本と韓国・朝鮮との関係の歴史を正しく教えて欲しいという願いを強く持っている。戦後の教科書を調べてみようという本調査の動機もそのあたりに根差したものである。しかし、教科書を読み、それを整理するという作業に終始してしまい、その変遷を当時の社会的背景の中で分析してみるという作業はできていない。今後の課題としたい。また、小学校の歴史教育が人物や文化遺産に重点をおいた方向に変わっていく中で、こうした記述が今後どのようになっていくか注目していきたい。

④韓国併合と強制連行										
記述の分量	小見出しの表記	特徴ある記述内容			朝鮮での反対運動抵抗運動	植民地支配の実態の記述				
		韓国併合		強制連行		土地調査事業	日本への移住	皇民化教育	創氏改名	徴兵令
60	日露戦争	韓国がわが国に併合され	そのころ政治がみだれて，国が弱まっていた韓国							
50	↓	↓	↓							
30	↓	わが国が韓国を併合し	大陸に発展する足場をかため							
30	↓	日本は韓国を併合し								
30	↓	↓	↓							
80	↓	↓	↓	朝鮮の人々もたくさん						
220	・日露戦争 ・苦しい国民生活	↓	大陸進出の足場をかため	朝鮮の人々も	○	○	○			
220	↓	↓	↓	↓	○	○	○			
250	・日露戦争 ・空しゅうの中のくらし	↓	70万人の朝鮮の人々 中国人 強制的に	○	○	○	○			
390 P	・韓国併合 ・空しゅうの中のくらし	↓	日本の植民地としました。	↓	○	○	○	○ P		
660 P P	・韓国併合 ・15年にもわたった戦争 ・戦争中の国民生活	↓	植民地とし日本の領土に	70万人の朝鮮の人々 4万人の中国の人々 強制的に	○ P	○	○	○ P	○	○
P P P P 1300	・韓国併合 ・太平洋戦争とアジアの人々	↓	↓	70万人の朝鮮の人々 4万人の中国の人々 強制連行	○ P．P	○	○	○ P	○	○

文と数え，いくつの文で書かれているかを数字で示した。なお教科書の本文以外に写真等の説明文として書かれていた。

表2　記述内容の「変遷」

年度		①渡来人			②秀吉の朝鮮侵略			③江戸時代の朝鮮通信使		
		記述の分量	小見出しの表記	特徴ある記述内容	記述の分量	小見出しの表記	特徴ある記述内容	記述の分量	小見出しの表記	特徴ある記述内容
62年(昭37)	全面改訂(A5版縦書き)	160	新しい技術	朝鮮半島の人たち	110	秀吉の全国統一		0		
65年(昭40)		160	↓	↓	100	↓		0		
68年(昭43)		170	大陸文化が伝わる	朝鮮半島の人々	120	↓		0		
71年(昭46)	全面改訂	210	大和朝廷のなりたち	朝鮮から	60	↓		0		
74年(昭49)		210	↓	↓	60	↓		0		
77年(昭52)		210	↓	朝鮮半島から	60	↓		10	鎖国	朝鮮との国交
80年(昭55)	全面改訂	210	朝鮮から来た人々	朝鮮から(渡来人)	100	↓	朝鮮民衆のはげしい抵抗	30	↓	↓
83年(昭58)		210	↓	↓	100	↓	↓	30	↓	↓
86年(昭61)		200	大和朝廷と渡来人	朝鮮から…渡来人	130	↓	↓	70 P	↓	↓朝鮮からの使い(写真)
89年(平1)		200	↓	↓	130	↓	↓	70 P	↓	↓ ↓
92年(平4)	全面改訂(B5版横書に変わる)	260	渡来人	↓	P 230	朝鮮侵略	↓ 大きな苦しみ	P P 190	↓	↓ ↓ 唐子おどり(写真)
96年(平8)		P P 300	渡来人のかつやく	朝鮮…大陸から…渡来人	P P P 370	↓	↓ ↓	P P 190	↓	↓ ↓ ↓

(注)

1　記述の分量……小見出し句読点等も1文字と数え四捨五入して10の位までの概数で示した。句点「。」までを一るもの（教科書では活字のポイントをおとして書かれている）もこれに含めた。

2　小見出しの表記……該当の記述がしてあるところの小単元の小見出し（教科書では太字で表記）をそのまま記し

3　写真・図などはPで示した。

4　前年度版と同じ場合は↓で示した。

5　④の項目で該当の内容にふれた記述がある場合は○，ない場合は空欄とした。

注

（1）「在日外国人教育方針」は一九九七年五月現在で四七の教育委員会が策定している。（全朝教調べ）『第一八回全国在日朝鮮人（外国人）教育研究大会要項集』

（2）「京都市立学校外国人教育方針――主として在日韓国・朝鮮人に対する民族差別をなくす教育の推進について――」京都市教育委員会一九九二年三月

（3）「現代社会科教育実践講座」第二巻　同刊行会『社会科教育年表』より

（4）「各学年の特色」（『小学社会平成八年度用編集趣意』大阪書籍P38）

（5）「編集の基本方針」（『新編新しい社会八年度小学校用内容解説資料』東京書籍P4）

（6）「小学校学習指導要領」の「内容の扱い」「ウ」の項では「取り上げて指導する」人物として、卑弥呼から野口英世まで四二人の名前を上げ、教科書への取り上げを事実上義務づけている。（文部省『小学校指導書社会編』学校図書一九八九年P77）

（7）（文部省『小学校指導書社会編』学校図書一九八九年P76）

（8）「世界の国々をもっと知ろう」――日本と朝鮮半島との関係を年表に――（『新編新しい社会6下』東京書籍一九九六年度版P58）／「日本と朝鮮半島とのかかわり」（年表）（『小学社会6年下』大阪書籍一九九六年度版P41）

（9）戦後新しくできた社会科において、一九四七年文部省著作の教科書が発行された

- 第二学年用「まさおのたび」　一九四八・二
- 第三学年用「たろう」　一九四八・六
- 第三学年用「大むかしの人々」　一九四八・九
- 第四学年用「日本のむかしと今」一九四八・一二
- 第五学年用「村の子ども」　一九四七・九
- 第五学年用「都会の子どもたち」一九四八・四
- 第六学年用「土地と人間」　一九四七・八
- 第六学年用「気候と生活」　一九四八・三

（10）一九四五・一二　GHQ指令「修身、日本歴史及び地理停止ニ関スル件」

（教科書回収・「墨ぬり」教科書・新教科書の作成指示）

四六・九　文部省著作　国民学校用教科書「くにのあゆみ（上・下）」発行

四七・五　文部省「学習指導要領社会科編（I）（試案）」発行

九　二学期から社会科の授業開始　（この頃から翌年にかけ、文部省著作の小学校社会科教科書が八冊発行される。ここでは歴史的な内容は、三年、四年用の教科書で扱われている。）

五〇・四　社会科検定教科書が発行される。

五四・四　文部省「小・中学校の社会科の指導計画について」通達

（「小学校高学年に地理・歴史の系統学習を」社会科が問題解決学習か、系統学習かの論争が盛んになる。）

五八・一〇　文部省「小学校学習指導要領」告示

（11）一九六一年四月に新しい学習指導要領が全面実施され、教科書が改訂された。大阪書籍版については、一九六二年度発行のものしか見つからなかったため、ここでは一九六二

年度から見ていくこととする。

(12) 「渡来人」という用語は東京書籍版では、一九八九年度版から登場する。(「新訂新しい社会6㈤」東京書籍一九八九年度版　P25)

(13) 文部省著作国民学校用教科書「くにのあゆみ㈤」(一九四六年九月) P4　「かうしてわが國と半島との交はりが深くなりましたので、半島や支那本土から大陸の文化が盛んにはいってきました。(中略) 大陸や半島からたくさんの人人が渡ってきて、わが國に住みつくやうになり……」

(14) 前掲書P4「朝廷は、これらの人人をこころよく迎へ、はたらきのある人には、重い役目や高い身分をあたへて、十分にうでをふるうはせました。」

(15) 「李三平」には (イ　サンピョン) と (り　さんぺい) の二通りのルビをつけている。九六年度版では、これ以外にも、三・一独立運動には (さんいち) (サムイル) の二通りのルビ、柳寛順には (ユ　クァンスン) のルビをつけている。

(16) 「侵略」という用語は東京書籍版では、九六年度の現行教科書で初めて出てくる。(「新編新しい社会6上」東京書籍一九九六年度版　P55)

(17) 李進熙氏は一九七九年に、高校日本史教科書を検討して次のように指摘している「戦後の教科書が江戸時代の善隣関係が回復するいきさつと、その善隣関係の投げかける意味を正しくかかないのは、朝鮮に対する戦前の間違った意識がまだ捨て切れていないからではないだろうか。」「教科書に書かれた朝鮮」講談社 (一九七九年) P146

(18) 「小学社会6年㈤」一九八〇年度版　大阪書籍　P107

(19) 江戸時代の「朝鮮との国交」が小学校教科書で記述されるようになるのは、各教科書によってまちまちである。東京書籍版では一九九二年度版で初めて、朝鮮との国交が開かれたことが記述されている。「こうして、海外への窓口は、オランダ・中国とは長崎、朝鮮とは対馬 (長崎県) に限られ、日本はこののち二百年以上も鎖国が続くこととなりました。」「新しい社会6上」一九九二年度版　東京書籍　P78

(20) 「教師用指導書小学社会6年上」一九九六年度版大阪書籍　P160

(21) 「小学社会6年㈥」一九九六年度版大阪書籍　P25

(22) 七七年度版では初めて「朝鮮との国交」や「強制連行」について簡単にふれている。

(23) 一九七七年度版の六種類の小学校歴史教科書を調べた報告は次のように結論づけている。(1)分量が極めて貧弱である。(2)ま正面から両国の関係を記述するのでなく、中国その他の国との「そえもの」的記述になっていることが多い。(3)本質にかかわる史実や状況が歪められたり欠落している。(教科書研究グループ「小学校教科書の朝鮮像」『季刊三千里』一九七九年夏一四号 P210)